松江市文化財調査報告書 第149集

アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う

松江城下町遺跡（母衣町100外）発掘調査報告書

平成24（2012）年9月

島根県松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第149集

アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う

松江城下町遺跡(母衣町100外)
発掘調査報告書

平成24(2012)年 9 月

島根県松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、平成23年度に委託を受けた、アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う松江城下町遺跡（母衣町100外）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、平成23年度に穴吹興産株式会社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した調査である。
3. 本調査地の名称、及び所在地は次のとおりである。

（名　称）　松江城下町遺跡（母衣町100外）

（所在地）　島根県松江市母衣町100、101-1、101、102、103、103-1、103-2、104、104-1、105-1、105-2、105-8

4. 現地調査の期間、調査面積は次のとおりである。

［有無確認試掘調査］平成23年 9月13日　トレンチ1本　4.5㎡

［範囲確認試掘調査］平成23年11月 4日　トレンチ2本　11.7㎡

［本 発 掘 調 査］平成23年11月14日～平成24年 2月22日　470㎡

［報 告 書 作 成］平成24年 4月 1日～平成24年 9月28日

5. 調査組織は以下のとおりである。

［平成23年度］試掘調査

調査主体者　松江市教育委員会　教育長　福島律子

事 務 局　松江市教育委員会文化財課　文化財課長　錦織慶樹

〃　調査係長　赤澤秀則

調 査 員　主任　川上昭一、副主任　徳永　隆

調査補助員　金森みのり（嘱託）、小川真由美（嘱託）

遺物整理員　荻野哲二（嘱託）

［平成23年度］本発掘調査

事 務 局　松江市教育委員会　教育長　福島律子

文化財課長　錦織慶樹、調査係長　赤澤秀則

専門企画員　曽田　健、主任　川上昭一

調査実施者　財団法人　松江市教育文化振興事業団

理事長　松浦正敬

常務理事　松浦克司、事務局長心得　原　成美

埋蔵文化財課長　藤原　博、調査係長　中尾秀信、

専門企画員　後藤哲男（事務担当）

調 査 指 導　島根県教育委員会　文化財課　調整監　廣江耕史

調査担当者　中尾秀信

調査補助員　清水初美

遺物整理員　　善家幸子

［平成24年度］報告書作成

事　務　局　　松江市教育委員会　教育長　福島律子

文化財課長　錦織慶樹、調査係長　赤澤秀則、

専門企画員　曽田　健、主任　川上昭一

実　施　者　　財団法人松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課

理事長　松浦正敬

常務理事　松浦克司、事務局長　原　成美

埋蔵文化財課長　藤原　博、調査係長　古藤博昭、

専門企画員　後藤哲男（事務担当）

担　当　者　　古藤博昭

調査補助員　　清水初美、渡邊真二

6. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々や機関から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略）

文化財調査コンサルタント株式会社　代表取締役　渡邉正巳

松江市教育委員会　文化財課　史料編纂室　主任編纂官　内田文恵

島根県立古代出雲歴史博物館、松江歴史館　主任主事　小山祥子、岡崎雄二郎

熊本大学　埋蔵文化財調査センター　技術補佐員　石丸恵利子

7. 本書に掲載した遺物の復元、実測、浄書、遺構の浄書に携わった遺物整理員。

善家幸子

8. 本書に掲載した現場写真は中尾、清水が、遺物写真は古藤が撮影した。

9. 本報告書の第2章は古藤と渡邊が執筆し、その他の執筆と本書の編集は古藤が行った。

10. 本書における方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を示す。

11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

陶磁器編年：『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会2000

12. 本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SK…土坑、SD…溝、SA…柱列、P…ピット、T…トレンチ

13. 本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

目　　次

例　言

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過…… 1

第２節　調査の範囲と方法…… 1

第２章　歴史的環境と遺跡の位置

第１節　歴史的環境…… 3

第２節　遺跡の位置と絵図による武家屋敷の変遷…… 4

第３章　調査の概要

第１節　土層堆積状況と遺構面…… 7

第２節　第1遺構面 …… 8

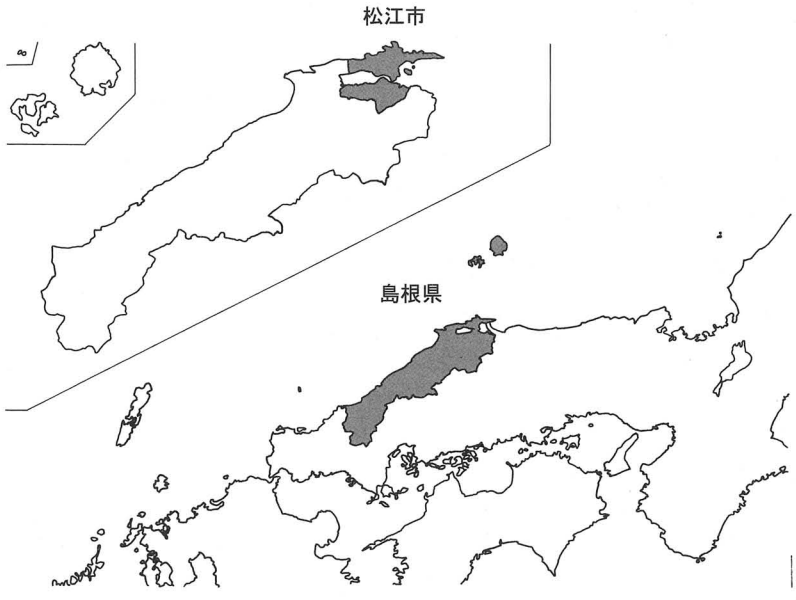
第３節　第2遺構面 ……11

第４節　第3遺構面 ……22

第５節　自然堆積層について……43

第６節　出土した動物遺存体について……44

第４章　まとめ ……45



第1図　島根県松江市位置図

挿　図　目　次

第１図　島根県松江市位置図
第２図　調査地位置図（1：15000）…… 1
第３図　調査地位置図（1：5000）…… 2
第４図　開発範囲及び調査区位置図（1：500）
…… 2
第５図　調査地周辺の江戸時代の絵図と
現在の地図…… 5
第６図　松江城周辺の主な中世の山城…… 5
第７図　土層層序模式図…… 7
第８図　第1遺構面遺構配置図 …… 9
第９図　SK01平面図・断面図……11
第10図　第2遺構面遺構配置図 ……12
第11図　SK01出土遺物……13
第12図　T-5、T-6土層断面図……14
第13図　SK15平面図・断面図……15
第14図　SK15出土遺物……15
第15図　SK16平面図・断面図……16
第16図　SK17平面図・断面図……16
第17図　SK16、17出土遺物……16
第18図　SD01出土遺物……17
第19図　SD01平面図・断面図……17
第20図　SA01平面図・断面図……18
第21図　SA01出土遺物……18
第22図　SA02平面図……18
第23図　遺構外出土遺物（第1~2遺構面）……20
第24図　遺構外出土遺物（第2遺構面）……21
第25図　SK02平面図・断面図……22
第26図　第3遺構面遺構配置図 ……23
第27図　SK02出土遺物……24
第28図　T-7土層断面図 ……25
第29図　SK03、SD02、SD03、
SD04平面図・断面図……26
第30図　SK03出土遺物(1)……27
第31図　SK03出土遺物(2)……28
第32図　SK05、06平面図・断面図……29
第33図　SK05、06出土遺物……29
第34図　SK07平面図・断面図……29
第35図　SK07出土遺物……30
第36図　SK08平面図・断面図……30
第37図　SK08出土遺物……31
第38図　SK10平面図・断面図……31
第39図　SK10出土遺物……31
第40図　SK12、SK13、SK14平面図・断面図
……32
第41図　SD03出土遺物……33
第42図　SD04出土遺物(1)……34
第43図　SD04出土遺物(2)……35
第44図　SD05出土遺物(1)……37
第45図　SD05出土遺物(2)……38
第46図　SD05出土遺物(3)……39
第47図　SD05出土遺物(4)……40
第48図　遺構外出土遺物（第2~3遺構面）(1)
……41
第49図　遺構外出土遺物（第2~3遺構面）(2)
……42
第50図　遺構外出土遺物（第3遺構面） ……42
第51図　自然堆積層の調査範囲図……43
第52図　SD05の推定範囲図……45

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

穴吹興産株式会社は松江市母衣町地内で、アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事を計画した。本工事の計画範囲は城下町として江戸時代に整備され、内山下（うちさんげ）と呼ばれる外堀の内側に位置する上級、中級武士の屋敷が置かれた場所である。

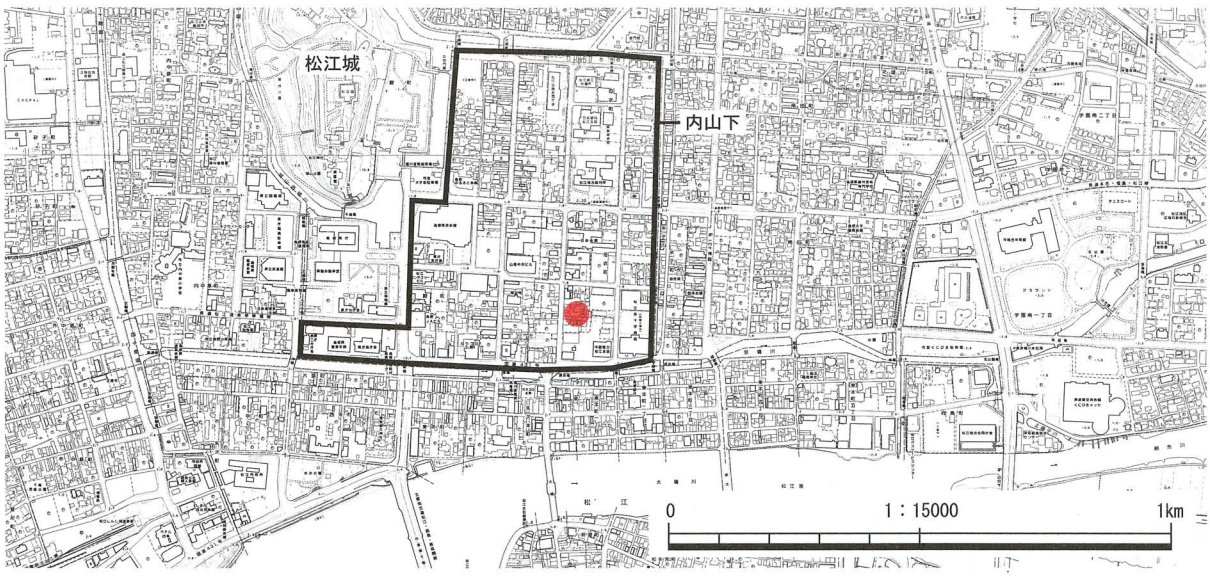
このことから、平成23年9月13日と同年11月4日に松江市教育委員会で計画範囲内での試掘調査を実施した。第1回目の調査時には既存建物の解体前であったが、調査可能な計画地内の西側1箇所にトレンチを設定し遺跡の有無の確認調査を実施した。この結果、3つの遺構面と考えられる土層の堆積が確認され、またゴミ土坑、掘立柱、素掘りの大溝か土坑と考えられる遺構が検出された。第2回目の調査では、計画地の東側に2箇所のトレンチを設定して遺跡の正確な範囲と遺構面数の確認を行った。その結果、建物礎石と思われる石や石組土坑が検出された。生活の痕跡のある遺構面は1面であり、西側の試掘結果とは異なるが、開発予定地全域に松江城下町遺跡が広がっていることが確認された。この結果により、建築工事前の本発掘調査が行われることとなった。

第２節　調査の範囲と方法

本発掘調査は、開発予定地1509.23㎡のうち、建物基礎により遺跡が影響を受ける507㎡を対象としたが、近隣住宅との境界付近に緩衝帯を設けたため、最終的な調査面積は470㎡である。

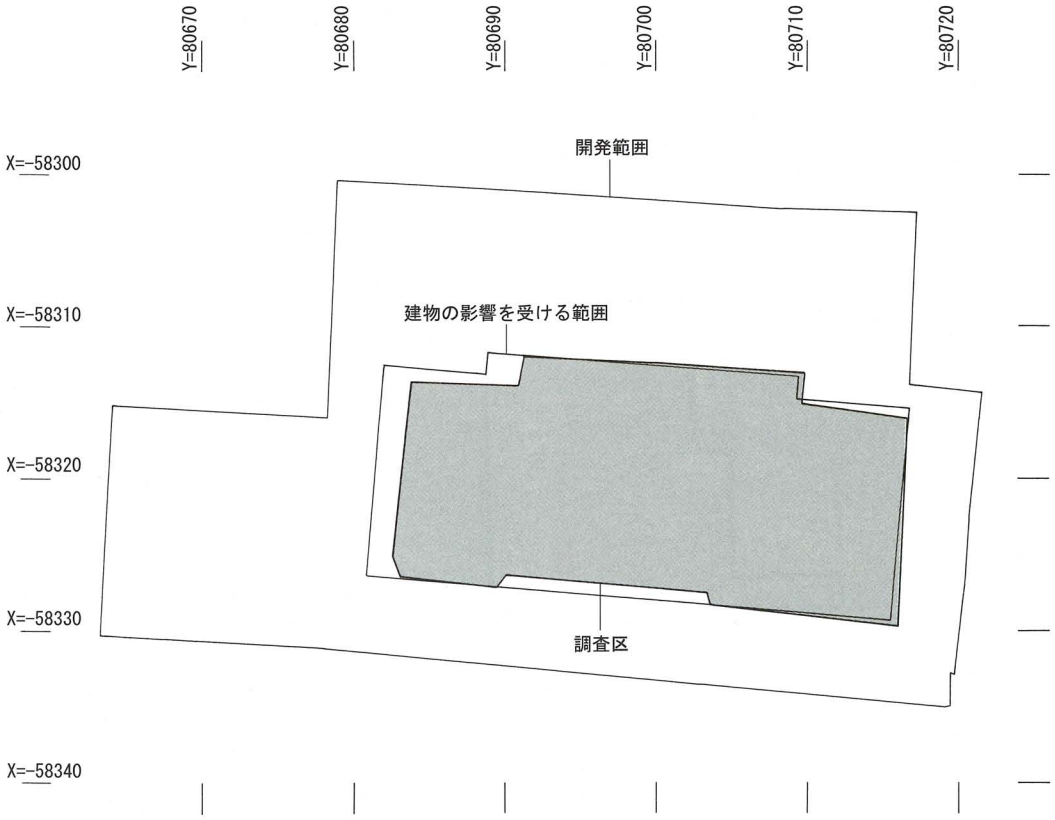
現地調査では対象区域を東西に2分し、その西側をⅠ区、東側をⅡ区として調査を行ったが、本報告ではそれぞれの調査区で検出された同時期の遺構面を一括して取り扱うものとする。

調査区の周囲には矢板の設置は行わず、安定勾配によって掘り下げた。現地表下の撹乱層の除去は重機を用いて行い、その後は人力掘削によって調査を行った。



第2図　調査地位置図

第3図　調査地位置図



第4図　開発範囲及び調査区位置図（1：500）

第２章　歴史的環境と遺跡の位置

江戸時代初頭に堀尾吉晴によって松江城と城下町が築かれた。現在も当時の武家屋敷、堀割り、道筋等が残り、地下には江戸時代の遺跡が良好な状態で残っている。

第１節　歴史的環境

中世の松江

この頃の出雲国の政治・経済的中心地は、広瀬町（現：安来市広瀬町）にあった。このため、広瀬町から約17kmも離れた松江に関する文献史料は少なく、よく分かっていない。近世以前の松江は8世紀頃からあまり変化がなく、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がり、中世になると宍道湖沿いの砂州上に「末次」・「白潟」といった「郷」があったとされている。[註1]

「末次」は、戦国時代には末次氏が治めており、永禄13年（1570）の尼子復興戦では尼子・毛利両軍の争奪戦の舞台となった。また、毛利時代には末次氏が毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから、末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる。[註2]

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』（明の嘉靖41年：1562年）の中に出雲地方の港湾のひとつとして「失喇哈吁（白潟）」と記載されている。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・末次・中町の磨師・塗師・鞘師などの司に任じていることから、この地に商人・職人の集団が存在し、町場が形成されていたことがうかがえる。[註3]

これら「郷」の周辺には、尼子十旗のひとつに数えられる白鹿城（ａ）や、雲芸攻防戦において毛利氏の前線拠点となった荒隈城（ｅ）などが点在する。いずれも雲芸攻防戦から尼子復興戦の期間に、新たに築城されたり改修され、戦塵をくぐった山城である。（第6図）

和暦	西暦	松江とその周辺に関わる略年表
天文 9	1540	尼子晴久　安芸遠征
天文11	1542	大内義隆　出雲侵攻
永禄 3	1560	尼子晴久逝去
永禄 5	1562	毛利元就　出雲侵攻
永禄 6	1563	白鹿城　陥落
永禄 9	1566	月山富田城　開城
元亀元	1570	尼子勝久・山中鹿助　月山富田城奪還
元亀 2	1571	尼子氏　出雲より撤退
慶長 5	1600	関ヶ原の戦い 堀尾忠氏、父吉晴と共に富田城入城
慶長 9	1604	堀尾忠氏逝去、吉晴が孫忠晴を後見する
慶長12	1607	松江城の築城開始
慶長13	1608	堀尾吉晴、富田城から松江城へ移る
慶長16	1611	6月堀尾吉晴逝去、年末に松江城完成
寛永10	1633	堀尾忠晴逝去、堀尾氏断絶する
寛永11	1634	京極忠高、若狭国小浜より出雲へ入国
寛永14	1637	京極忠高逝去
寛永15	1638	松平直政、信濃国松本より出雲へ入国
明治 2	1869	版籍奉還　松平定安藩知事に任命
明治 4	1871	廃藩置県　松江県を経て島根県となる

江戸時代の松江藩主の移り変わり

1600年、関ヶ原の戦いで武功を上げた堀尾忠氏に出雲国・隠岐国が与えられ、遠江国浜松（現：静岡県浜松）から父吉晴と共に月山富田城に入った。

その後、1607～1611年頃、父吉晴が早世した忠氏の遺志を受け継ぎ、亀田山に松江城を築き、家臣と共に広瀬から松江に移って来てい

る。堀尾氏は嗣子無く三代で断絶となった。

1634年、若狭国小浜（現：福井県小浜）から出雲へ入国した京極忠高が松江藩主になるが、1637年に逝去、一代で断絶となる（半年後に播磨国龍野6万石で再興）。

忠高は、わずか3年余りの統治であったが、その間に治水工事や殖産興業を行うなど、その治績は大きかった。

1638年、信濃国松本（現：長野県松本）から入国した松平直政が松江藩主となり、明治維新を迎えるまでの230年間、松平氏十代にわたり藩政は続いた。

城下町の形成・構造

城下町の建設は、慶長12年（1607）に着工され、慶長16年（1611）に完成したとされている。

城下町の形成にあたり、まず、城下の東側・南側に広がる軟弱な砂州や湿地を埋め立て、地盤を強固にする造成の必要があった。造成土には、築城や堀を掘った際に排出した土を使い、地盤をかためて家臣の屋敷地とした。町の構造は、城郭の周囲に上級・中級の家臣団の屋敷地を配置している。そして、その外側に町人地を配置し、それらを取り囲むように寺社や下級の家臣団の屋敷地を配置している。また、城下の要所には鉤型路、袋小路、勢溜等の防衛施設を配置し城の守りを固めている。

明治以降の城下町

松江藩は、明治4年（1871）の廃藩置県で松江県を経て島根県となる。明治22年（1889）に松江市政が始まり、県庁所在地として発展し現在に至る。明治時代に入り、それまでの武家地は、そのまま公共施設に利用されたり、広大な土地は細かく短冊状に分筆されたりして庶民の住宅地へと移り変わっていく。現在でも通りや路地、外堀、内堀、鉤型路等が残っており、江戸時代の町割りの面影を見ることができる。

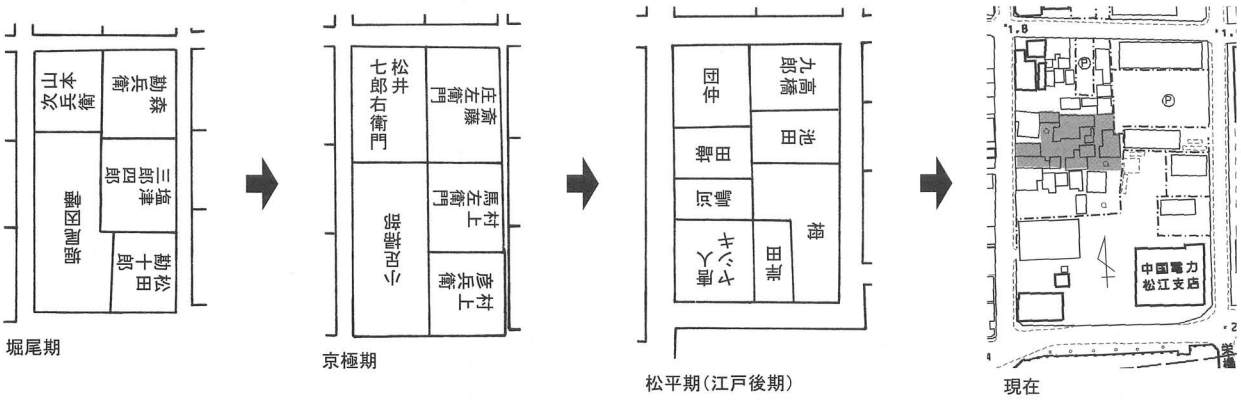
第２節　遺跡の位置と絵図による武家屋敷の変遷

今回の調査地は、松江市母衣町100番地外に所在し、松江城本丸の南東約700mに位置する。南を流れる京橋川は、松江城の外堀の一角を担っており、外堀の内側は「内山下」（現在の殿町、母衣町）と呼ばれ、江戸時代を通じて上級・中級武士が住んでいた場所である。母衣町は内山下に位置し、江戸時代の松江城下町絵図から今回の調査地に該当する屋敷地を読み取ることができる。

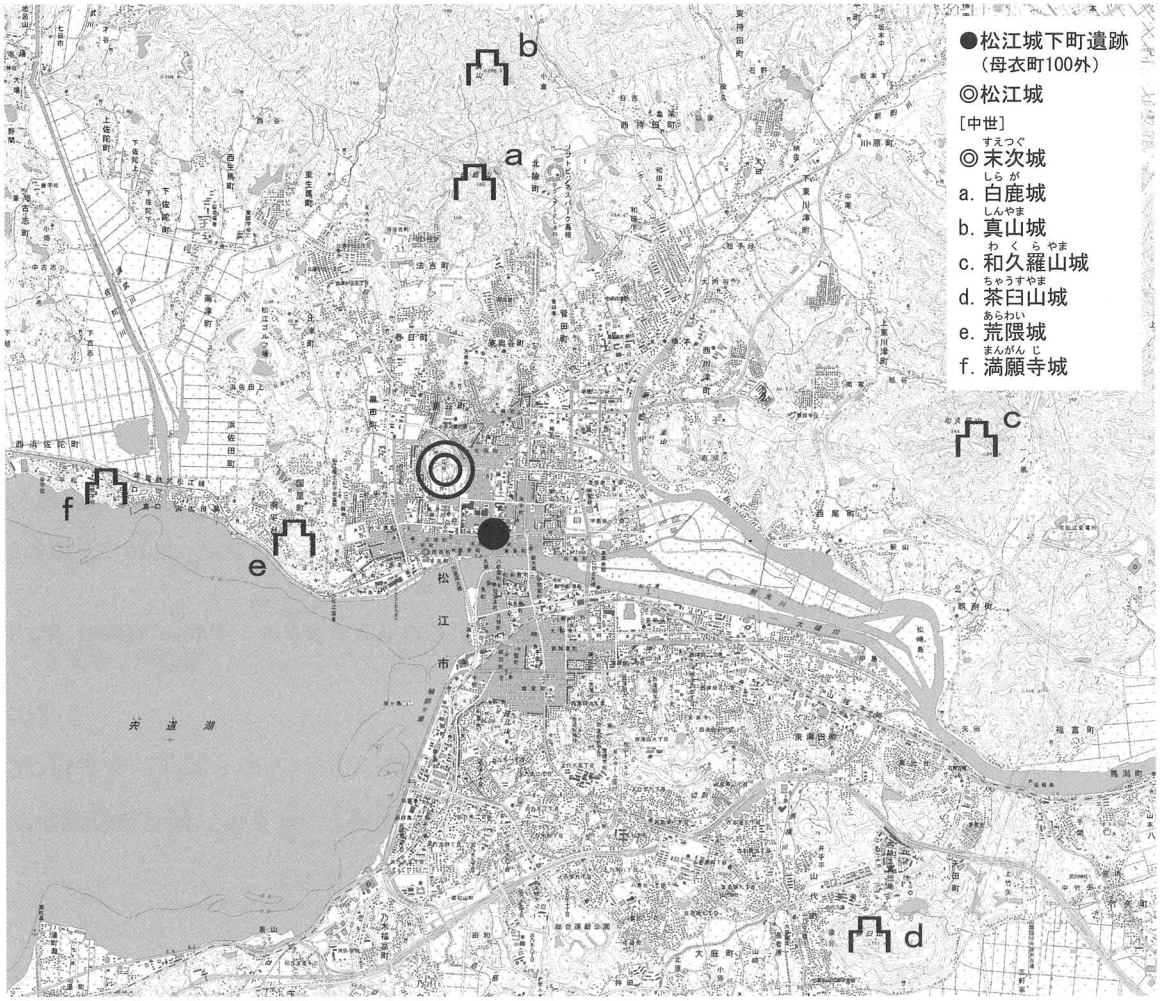
第5図は堀尾期[註4]、京極期[註5]、松平期（江戸後期）[註6]の絵図を参照したものである。

調査地は、絵図を現在の住宅地図の縮尺にあてはめると、堀尾期には重臣であった「堀尾因幡・4,900石」の屋敷地、京極期には「小足掃部・1,035石」と「松井七郎右衛門・500石」の屋敷地にまたがる可能性があり、松平後期には「増田」[註7]の屋敷地にそれぞれ比定されるものと考えられる。

なお、模式図中の「人名」は、絵図面に書かれているものをそのまま記載した。



第5図　調査地周辺の江戸時代の絵図と現在の地図



第6図　松江城周辺の主な中世の山城（1：70000）

註

註１　松尾寿『松江市ふるさと文庫5　城下町松江の誕生と町のしくみ－近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン－』「Ⅲ．城と城下町の建設　城下町誕生前の末次・白潟」松江市教育委員会　2012年

註２　山根正明『松江ふるさと文庫6　堀尾吉晴城－松江城への道－』松江市教育委員会　2009年

註３　岡宏三『松江藩の時代』「中世のプレ松江」山陰中央新報　2008年

註４　「堀尾期松江城下絵図」（島根大学附属図書館蔵）を参照しトレース図を作成

堀尾期：堀尾氏の治世であった1607（慶長12）年から1633（寛永10）年

註５　「寛永年間松江城家敷町之図」（丸亀市立資料館蔵）を参照しトレース図を作成

京極期：京極氏の治世であった1634（寛永11）年から1637（寛永14）年

註６　「松平期松江城下絵図」（島根大学附属図書館蔵）を参照しトレース図を作成

松平期：松平氏の治世であった1638（寛永15）年から明治に入るまでの期間

註７　松江市史料編纂室によると、現時点で家主の名は特定されていない。

参考文献

・松江市文化財調査報告書第139集『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）発掘調査報告書―松江歴史館整備事業に伴う発掘調査報告書―』島根県松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団　2011年

・松尾寿『松江ふるさと文庫5　城下町松江の誕生と町のしくみ－近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン－』第二刷　松江市教育委員会　2012年

・山根正明「戦乱の中に生きる」『図説　日本の歴史32　島根県の歴史』河出書房新社　1997年

・内藤正中「山陰の城下町」『図説　日本の歴史32　島根県の歴史』河出書房新社　1997年

・西島太郎「京極期松江城下町図と分限帳－諸本の比較検討－」『松江歴史館研究紀要第1号』松江歴史館　2011年

・『松江市歴史的風致維持向上計画』松江市　平成23年1月

・『江戸時代へ行こう！－松江城下町ものがたり－』松江歴史館　平成23年12月

・島根県中近世城館跡分布調査報告書第2集『出雲、隠岐の城館跡』島根県教育委員会　平成10（1998）年3月

第３章　調査の概要

第１節　土層堆積状況と遺構面

松江城下町の地表面は、江戸時代の初頭に城下町が作られて以来、何度かの嵩上げ造成が行われて現在に至るものである。近年の発掘調査によって、明らかになってきたことは、旧表土層の上に第1造成土（以下「A層」）が盛られ、その後、場所によって土質や厚さに違いはあるが、江戸時代の造成土（以下「B層」）がその上に盛られることである。A層は堀や屋敷境の溝などを掘削した際の土を利用したものと考えられ、旧表土層の土である黒褐色～暗褐色の有機質粘土層（以下「第Ⅰ層」）とさらに下層の灰色細砂層（以下「第Ⅱ層」）や青灰色粘質土層（以下「第Ⅲ層」）の混ざり合った土層である。B層の上層は近、現代の造成などで撹乱を受けた層（以下「C層」）となる。

今回の調査地においても基本的な土層堆積状況は前述した他の城下町遺跡と同様であった。

現地表面（標高約1.8~2.0m）から標高約1.0～1.2mまでは近～現代の撹乱土が堆積している。試掘調査の段階でこのことが判明しており、現地調査時にはこの土層は重機によって除去した。重機掘削の際には近、現代の陶磁器に混じって江戸時代の遺物も検出された。

第1遺構面　撹乱層を除去して精査を行った面を便宜的に第1遺構面とした。この面では現代の建物の基礎杭、木枠、石組方形土坑の石とその下に胴木、廃棄土坑や来待石製の井枠が検出されたが、人々の生活していた面ではないと判断した。また、検出された遺構は明治期以降のものと判断した。

第2遺構面　標高約1.0～1.3mの緑灰色～暗褐色砂質土、暗灰色粘質土、黒色土を基盤とする遺構面である。この面では廃棄土坑、溝状遺構、柱列を検出した。検出された遺物の時期は、堀尾期（1607~1633年）の17世紀初頭から松平期（1638~1871年）の19世紀代に入るものまであり幅が広いことから、遺構の時期を特定することは難しい。

第3遺構面　標高0.8～1.0mのA層（黒褐色粘質土のブロックの混じる灰色細砂層）を基盤とする遺構面である。この面では廃棄土坑や性格不明の土坑群、また、溝状遺構が検出された。遺構内から検出される遺物の時期は、古いもので松江城築城の頃の16C末から17C初頭を示すものから、18C代のものまである。

第3遺構面の基盤となるA層の下層は自然堆積層で旧表土層の黒褐色粘質土（第Ⅰ層）であり、その下層は灰色細砂層（第Ⅱ層）、さらにその下は青灰色粘質土層（第Ⅲ層）となる。

地表面

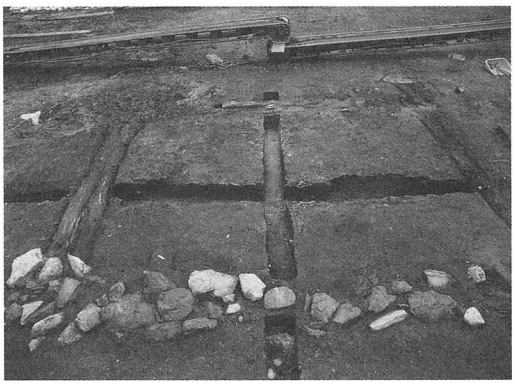
	C層：攪乱層
	B層：江戸時代の造成土
	A層：第1造成土
	Ⅰ層：黒褐色～暗褐色系の有機質粘土層(旧表土)
	Ⅱ層：灰色細砂層
	Ⅲ層：青灰色粘質土層

第7図　土層層序模式図

第２節　第1遺構面（第8図）

便宜的に第1遺構面としたのは、撹乱層を取り除いた段階で精査を行った標高1.2～1.6 mあたりの遺構面である。この高さが生活面となっていたのかは疑わしい。

検出された遺構には石組方形土坑の胴木、廃棄土坑、現代の基礎杭が見つかっている。いずれも深い遺構の底部分が残っているだけで、本来はもう少し上方に生活面があったと考えられるが、撹乱によって消滅している。撹乱層の深い位置からは明治期の遺物が検出され、また、遺構内からも明治期の遺物が検出されることから、いずれの遺構も明治期以降のものであり、面としても新しい時代の撹乱を受けていることから、それぞれの遺構の説明は割愛する。



石組方形土坑

胴木

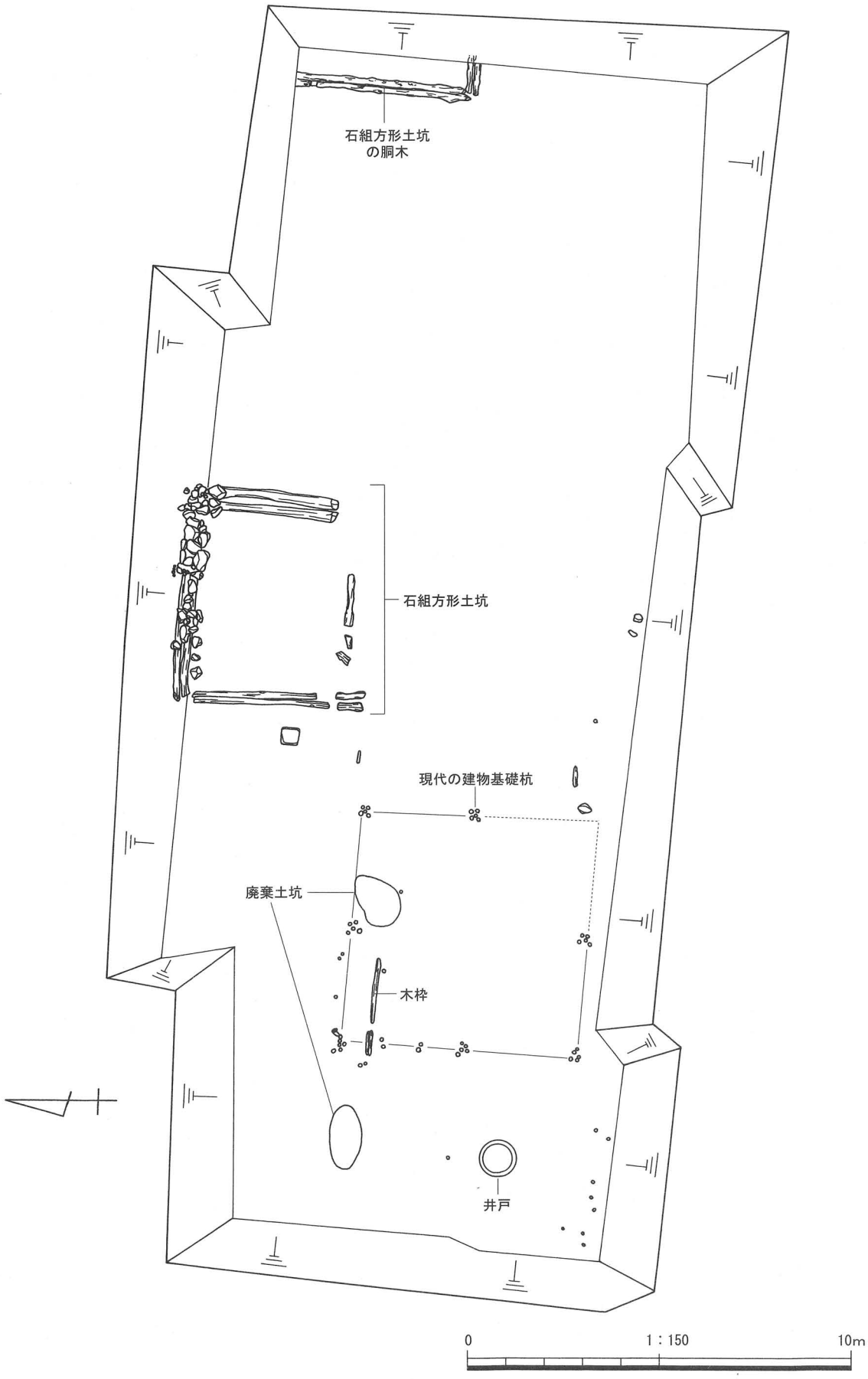
木枠

現代の基礎杭

廃棄土坑

井戸

第1遺構面の遺構検出状況写真



第8図　第1遺構面遺構配置図

撹乱土層中から出土した遺物写真

1．赤間硯
2．小瓶
3．羽釜（ミニチュア）
4．用途不明土製品（2枚貝を模したもの）
5．段重（化粧道具：江戸時代末期～明治時代）
6．磁器碗（17C中頃）
7．肥前青磁の香炉
8．油注（汁次）（布志名焼）
9．磁器碗（端反形：1810～1860年代）
10．酒徳利
11．大型鉢（刷毛目塗、肥前系陶器）
12．植木鉢（肥前系陶器）

第３節　第2遺構面（第10図）

標高約1.0～1.3ｍで検出された緑灰色～暗褐色砂質土、暗灰色粘質土、黒色土（第12図第1~3層、第11、15、16層）を基盤とする遺構面である。

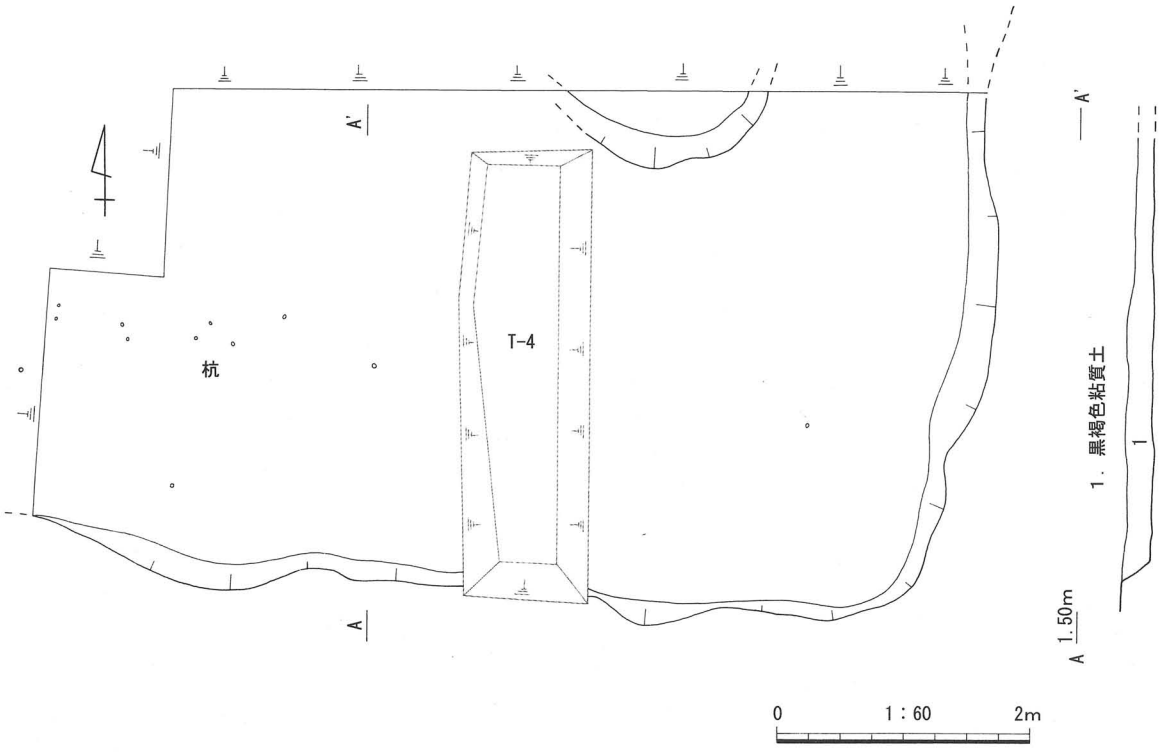
この面では土坑SK01、15、16、17、溝状遺構SD01、柱跡SA01、02を検出した。

SK01（第9図）

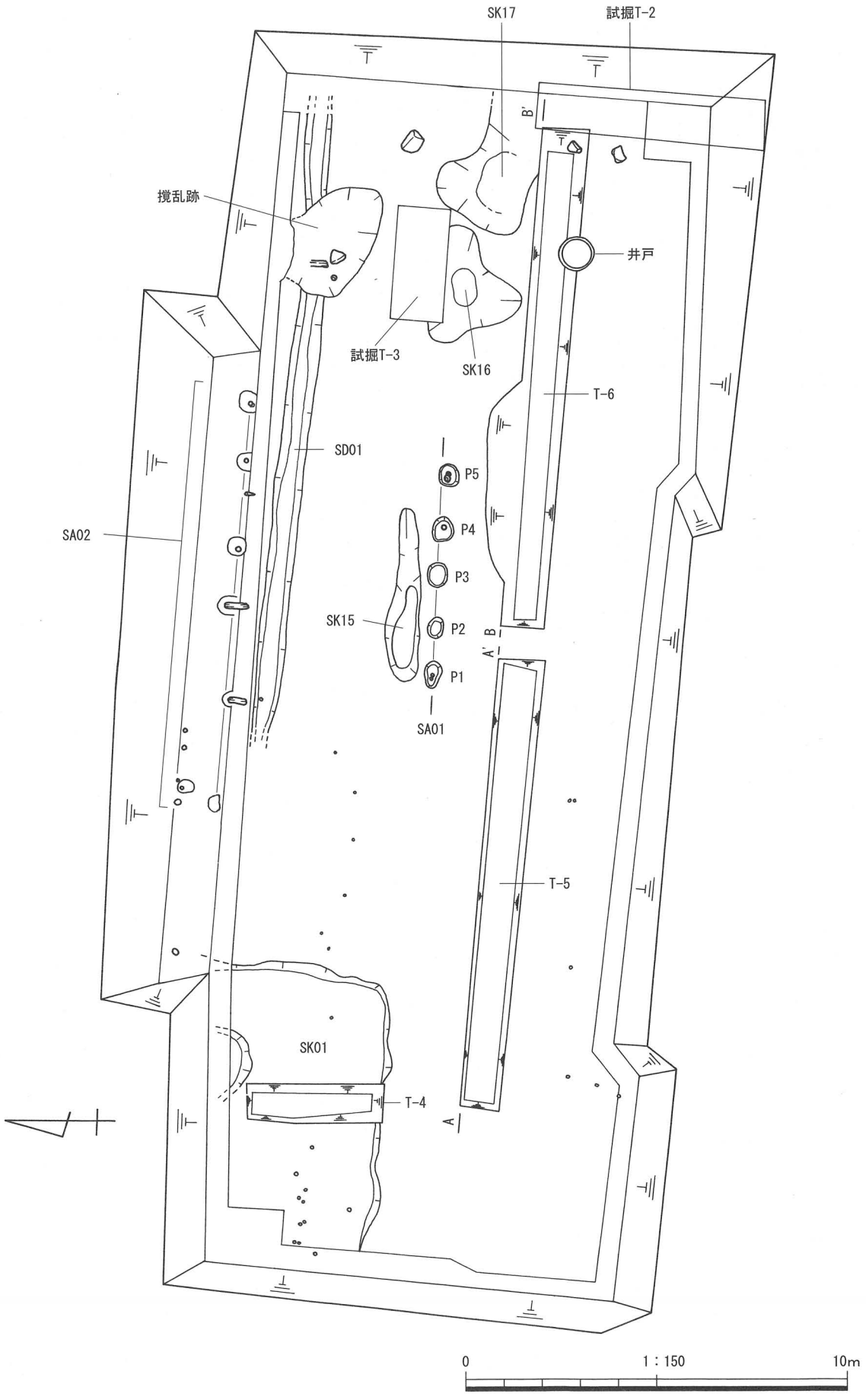
調査区北西部で検出された土坑である。平面形状は隅丸方形を呈する。規模は南北4.5ｍ以上、東西7.5ｍ以上、深さは0.045ｍ～0.12ｍを測る。遺構内からは、土師器、陶磁器の他に動物遺存体（骨）が検出された。

SK01出土遺物（第11図）

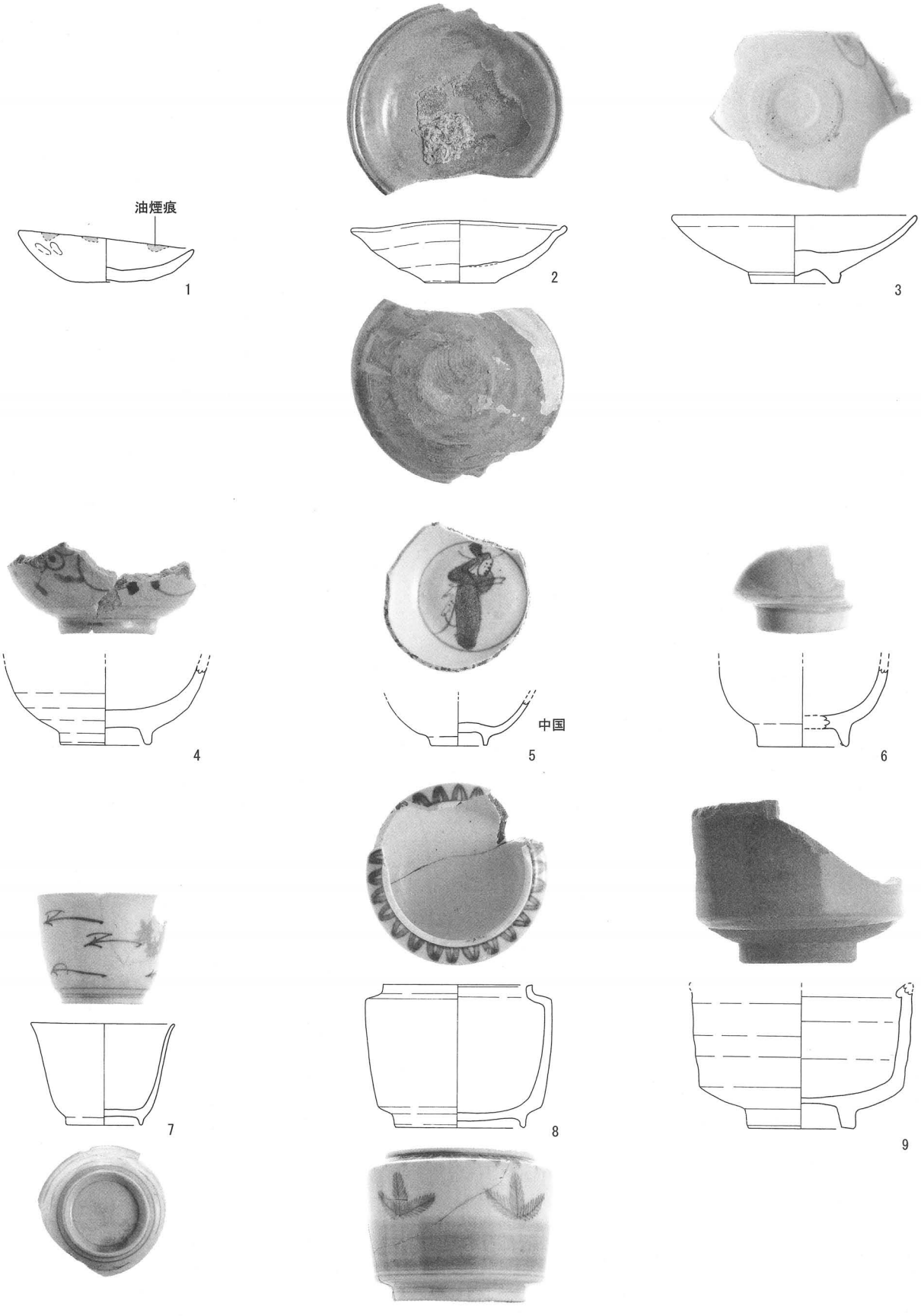
1は手づくねの土師器の皿である。表面はナデが施される。口縁端部に油煙痕が残されていることから、燈明皿として使用されたものと思われる。2は肥前陶器の皿である。口縁部は溝縁状を呈し、内面見込みに砂目跡、底部に回転糸切り痕が残る。3は肥前磁器の皿で、いわゆる「くらわんか手」と呼ばれるものである。見込み部は蛇の目釉剥ぎが施される。4は肥前磁器の陶胎染付碗である。5は中国磁器の小碗である。漆継により補修された跡が見られる。6は肥前磁器の碗である。生産地年代は1650年代頃である。7は肥前磁器の端反形の小杯である。生産地年代は1690～1780年である。8は肥前磁器の火入れで、外面に杉文が描かれる。漆継により補修された跡が残る。9は肥前陶器の火入れである。



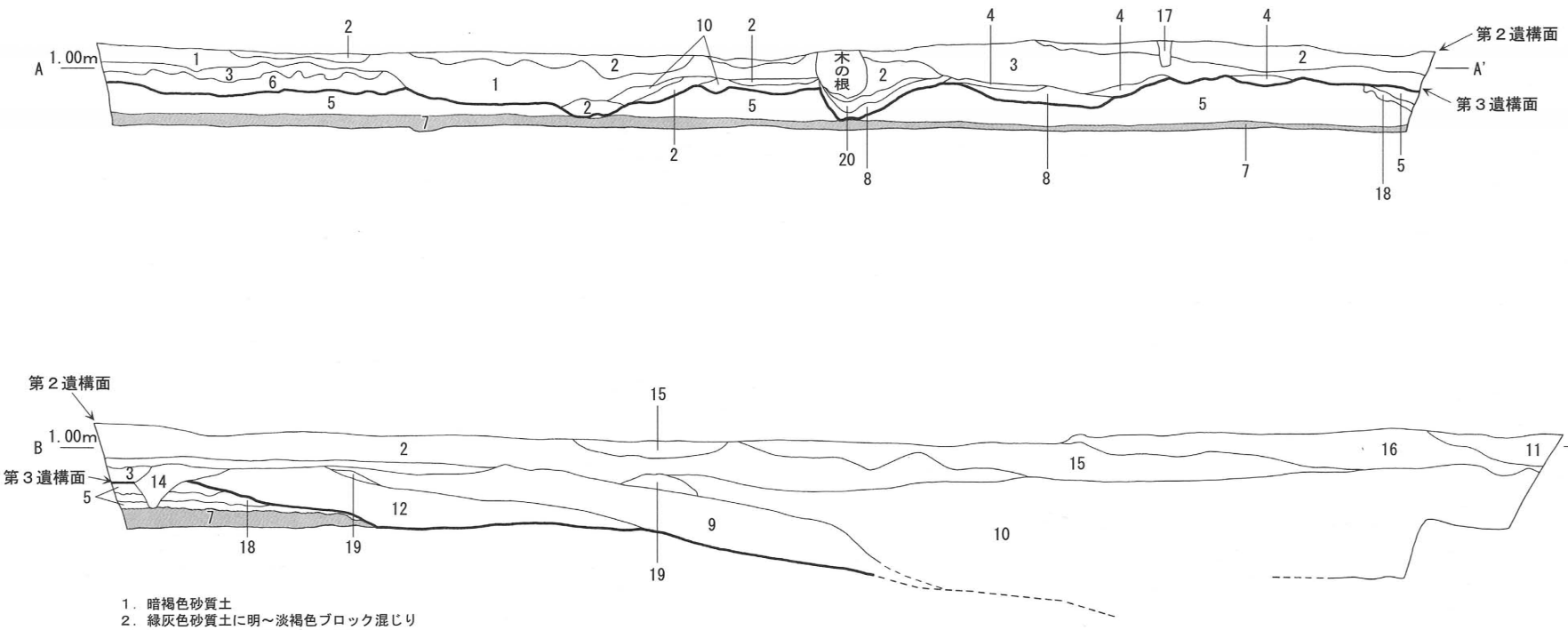
第9図　SK01平面図・断面図



第10図　第2遺構面遺構配置図



第11図　SK01出土遺物



1．暗褐色砂質土
2．緑灰色砂質土に明～淡褐色ブロック混じり
3．灰色砂質土に１、２のブロック混じり
4．暗褐色土
5．灰色細砂層に黒褐色粘質土混じり（第１造成土：Ａ層）
6．黒褐色砂質土に灰白色砂質土ブロック混じり
7．黒褐色粘質土（自然堆積層：第Ⅰ層）
8．黒褐色有機物堆積層
9．灰白色砂質土に灰色砂質土ブロック混じり
10．黒褐色砂質土と灰白色砂質土ブロック、灰色砂質土ブロック、黒色土ブロックの混合土
11．暗灰色粘質土（瓦、遺物含む）
12．暗灰褐色砂質土（ウラジロ、遺物、木製品含む）
13．暗灰色粘土
14．暗褐色粘質土
15．黒色土
16．黒色土に灰色砂質土ブロック混じり
17．灰色粘土（杭）
18．黒褐色粘質土（大きなブロック状）（第１造成土：Ａ層）
19．黒褐色有機物堆積層に黒褐色砂混じり（ウラジロ、遺物含む）
20．淡灰色～暗灰色砂質土

0　1：60　2m

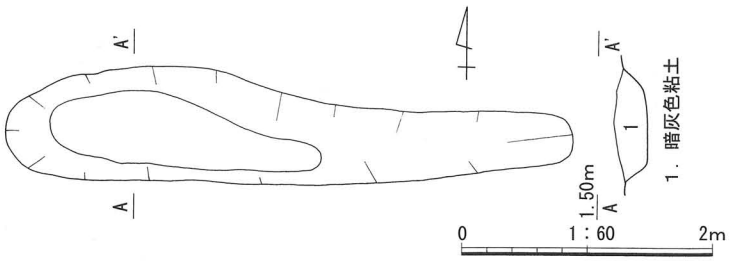
第12図　T-5、T-6土層断面図

SK15（第13図）

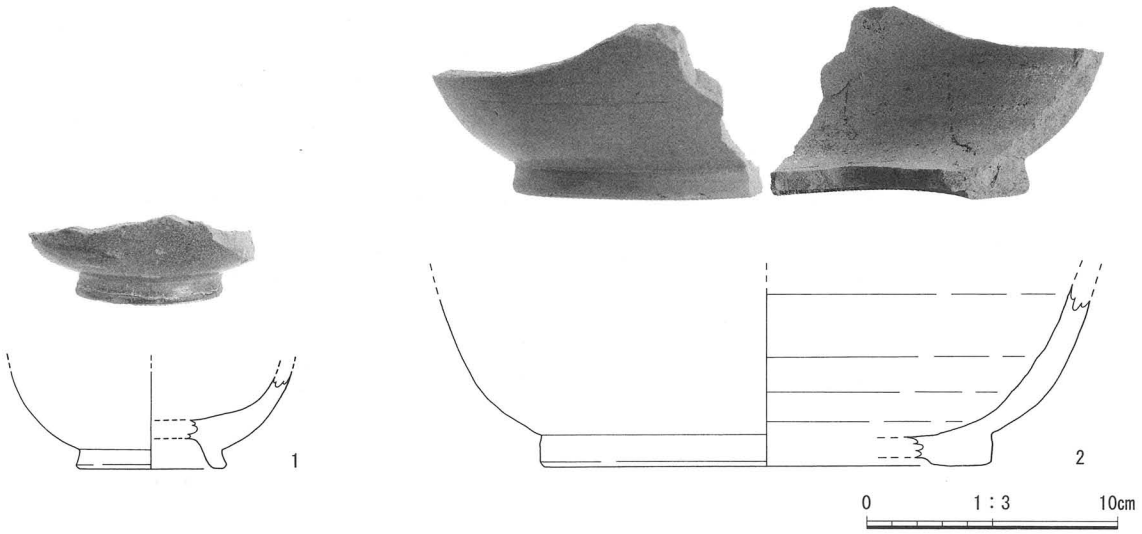
調査区中央で検出された廃棄土坑である。平面形は東西方向に長い長円形を呈する。規模は長径4.55m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。遺構中からは、瓦と陶器、土師器が検出された。

SK15出土遺物（第14図）

1は肥前陶器の碗である。九陶Ⅳ期にあたる。2は布志名の鉢である。その他、回転糸切痕の残る土師器の皿の底部、備前焼の擂鉢が検出された。



第13図　SK15平面図・断面図



第14図　SK15出土遺物

SK16（第15図）

調査区東側で検出された廃棄土坑である。平面形は隅丸三角形を呈する。規模は長径3.1m、短径1.45m、深さ0.27～0.44mを測る。

遺構中からは、瓦と陶磁器が検出された。

SK16出土遺物（第17図-1~3）

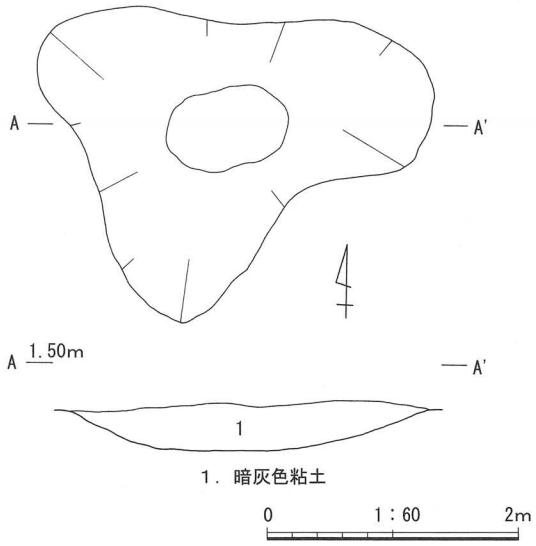
1は肥前陶器の皿である。内面には銅緑釉が掛けられ、見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。九陶Ⅳ期にあたる。2は備前の壺である。3は肥前磁器の鉢である。九陶Ⅴ期にあたるものである。

SK17（第16図）

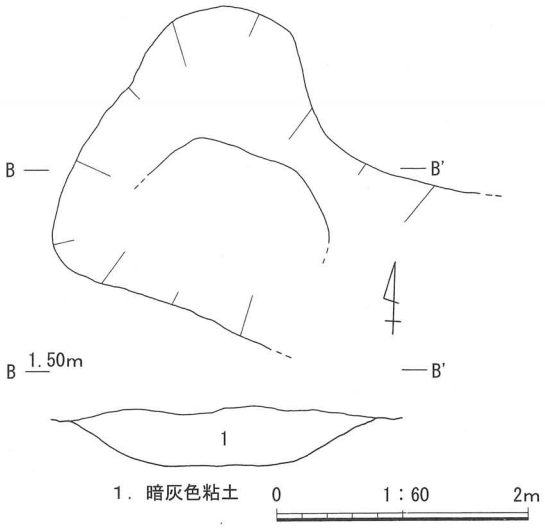
SK16の東で検出された廃棄土坑である。平面形は検出範囲では不整な方形を呈する。規模は長径3.35m以上、短径1.65m、深さ0.45mを測る。この遺構は調査区外の東に続くものである。

SK17出土遺物（第17図-4）

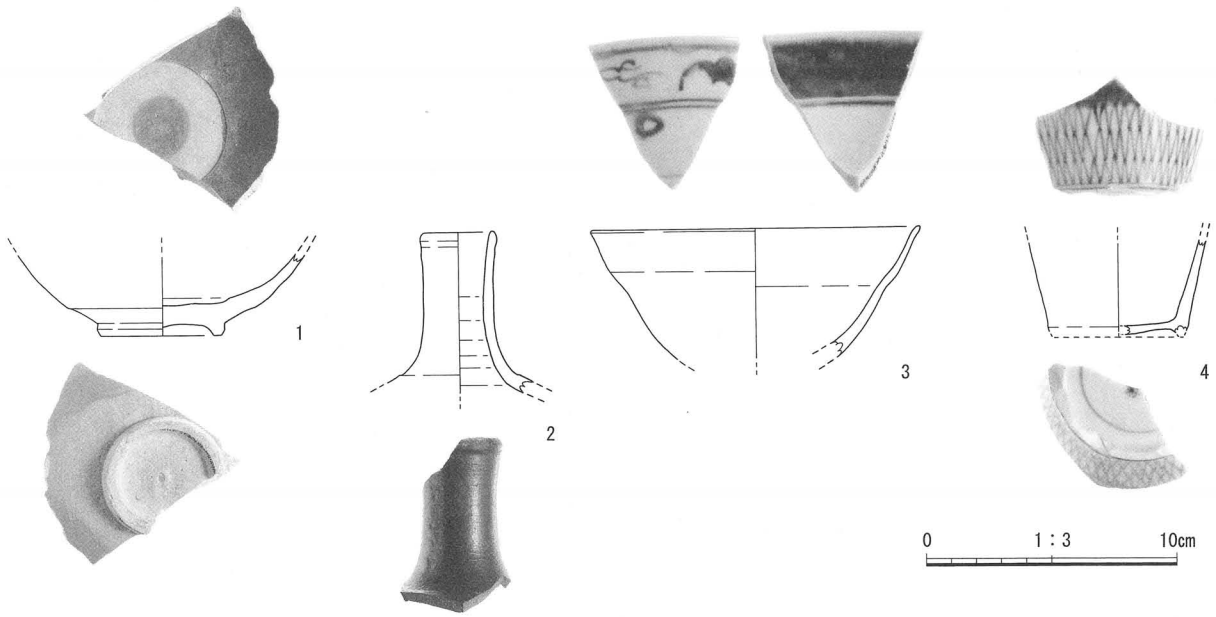
4は肥前磁器の猪口である。外面には網目文が入る。九陶Ⅳ期を示すものである。



第15図　SK16平面図・断面図



第16図　SK17平面図・断面図



第17図　SK16、17出土遺物

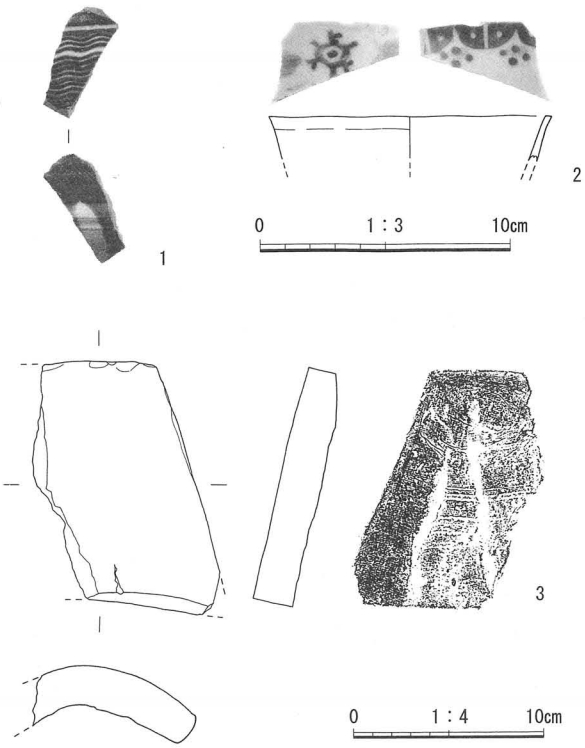
SD01（第19図）

調査区北側の中央から東にかけて検出された溝状の遺構である。遺構の長さは東西で16.45m、幅は0.7m、深さは0.1～0.15mを測る。遺構の東側部分は石組方形土坑によって掘り込まれているため、さらに東に続くものであるかは不明。また、東側では撹乱土坑の掘り込みによって一部消失している。

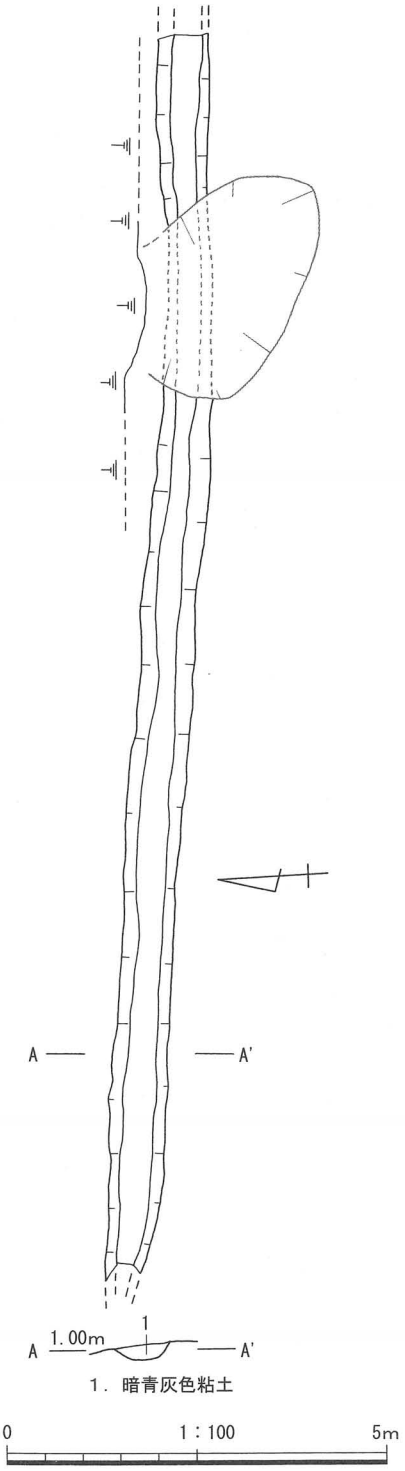
溝の底面に東西で高低差は無かった。

SD01出土遺物（第18図）

1は肥前陶器の皿である。刷毛目塗りが施される。九陶Ⅱ～Ⅲ期にあたる。2は肥前磁器の碗である。生産地年代は不明である。3は軒込瓦で、コビキBである。



第18図　SD01出土遺物



第19図　SD01平面図・断面図

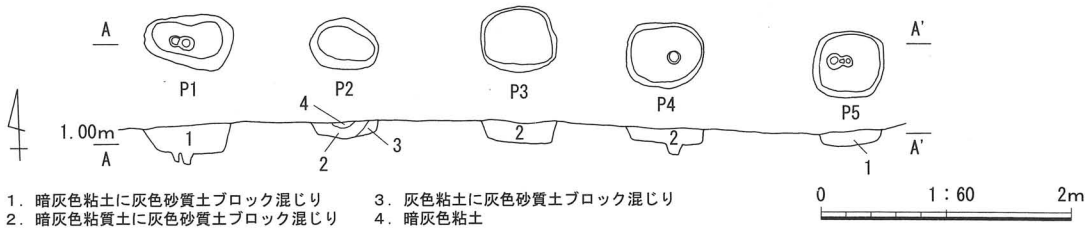
SA01（第20図）

調査区の中央で東西方向に並ぶ形で検出された5つの柱跡である。これらの柱跡を西からP1、P2、P3、P4、P5とした。柱跡には直径約0.3～0.6mの掘り方があり、その中心にP1とP5では2箇所、P4では1箇所に直径約0.1mの柱痕が残る。検出面から遺構下端までの深さは、0.1～0.3mを測る。中心間の距離は1.2～1.5mである。

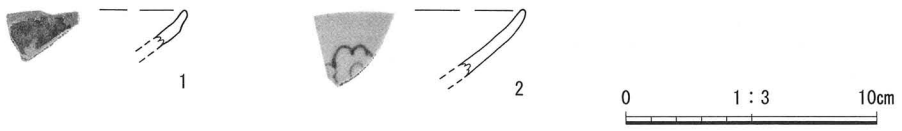
遺構内から遺物が検出されたのは、P3とP4である。

SA01出土遺物（第21図）

1はP3で検出された肥前陶器の皿の小片である。口縁部に油煙痕があり、燈明皿として転用されたものと思われる。2はP4で検出された肥前磁器の皿である。九陶Ⅱ-2～Ⅲ期を示す。



第20図　SA01平面図・断面図

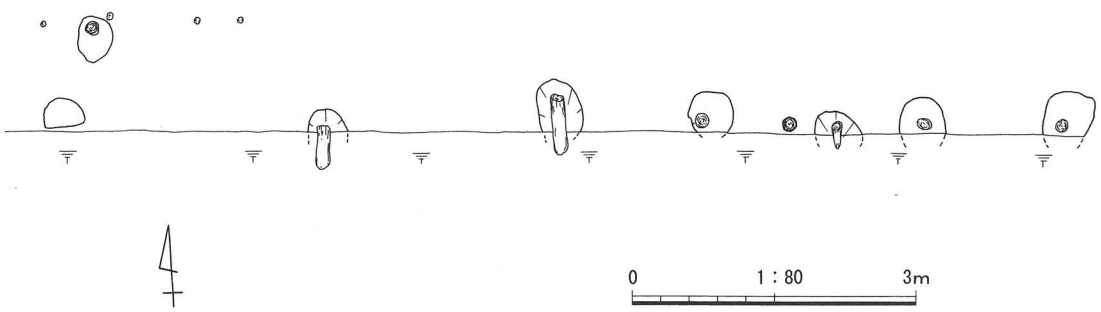


第21図　SA01出土遺物

SA02（第22図）

調査区の北側で検出された東西方向に並ぶ柱跡である。

検出されたのは合計で9箇所であり、直径約0.3mの掘り方に直径0.1～0.13m、長さ0.5～0.6mの柱が残っていた。西側の1箇所は平面形半円形の掘り方しかなく柱は無かった。その北側の柱跡は直線上に無いことから別の遺構の可能性もある。中央の2箇所では、柱の頭が北に傾いていた。柱の間隔は不均等で、0.6～2.5mを測る。



第22図　SA02平面図

遺構外出土遺物（第1~2遺構面）（第23図）

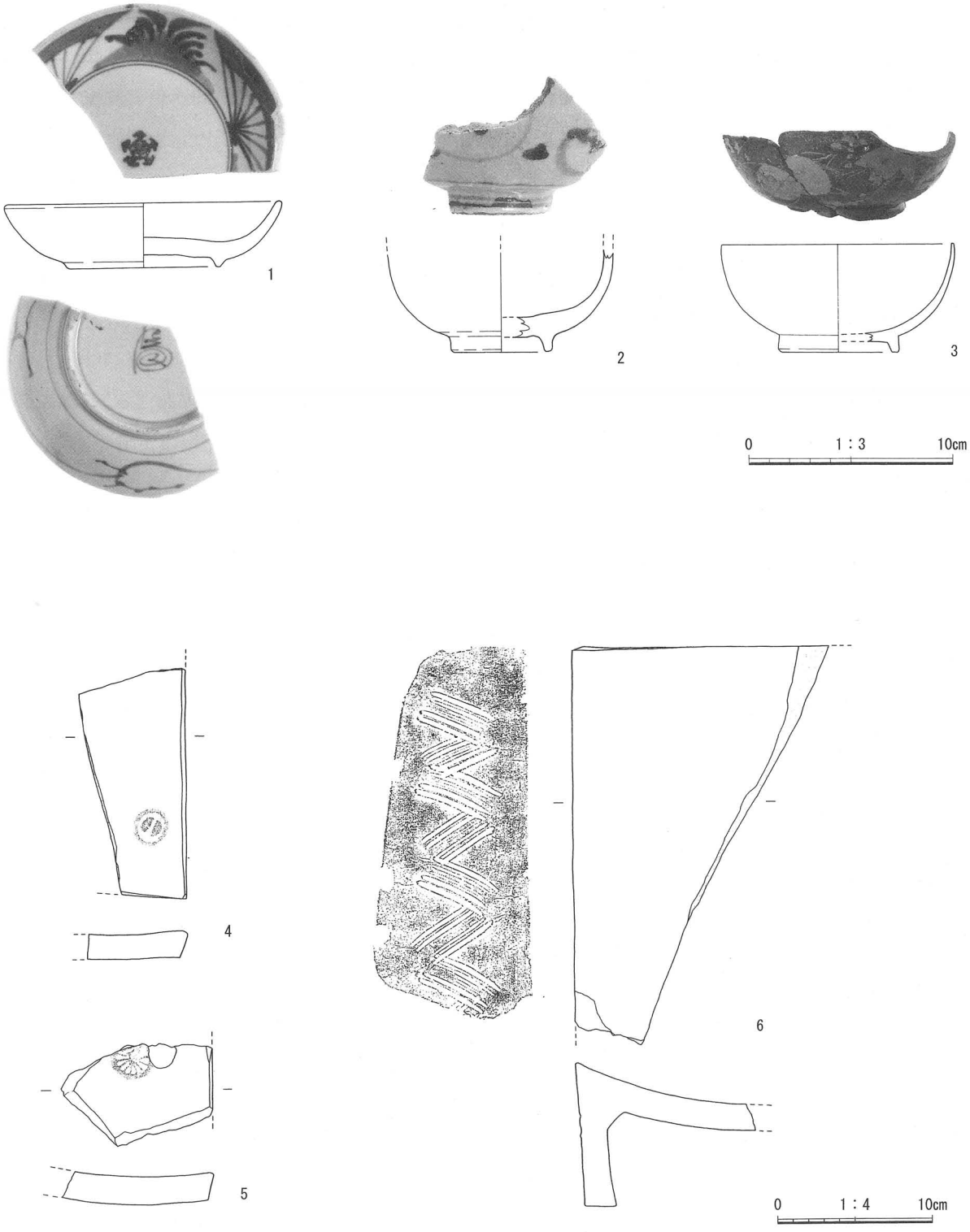
以下は第1遺構面下から第2遺構面に至るまでの遺物包含層から検出された遺物である。

1は肥前磁器の皿である。見込みには五弁花文が描かれ、高台内には渦「福」の銘が入る。九陶編年Ⅳ期にあたるものである。2は肥前磁器の碗である。3は漆椀である。内面は赤色の漆塗りが施され、外面は黒色の漆塗りに赤絵が描かれる。4は平瓦である。丸に一文字のスタンプが押されている。5は平瓦である。菊花文のスタンプが押されている。6は袖瓦である。袖垂れ部には櫛による模様が描かれる。

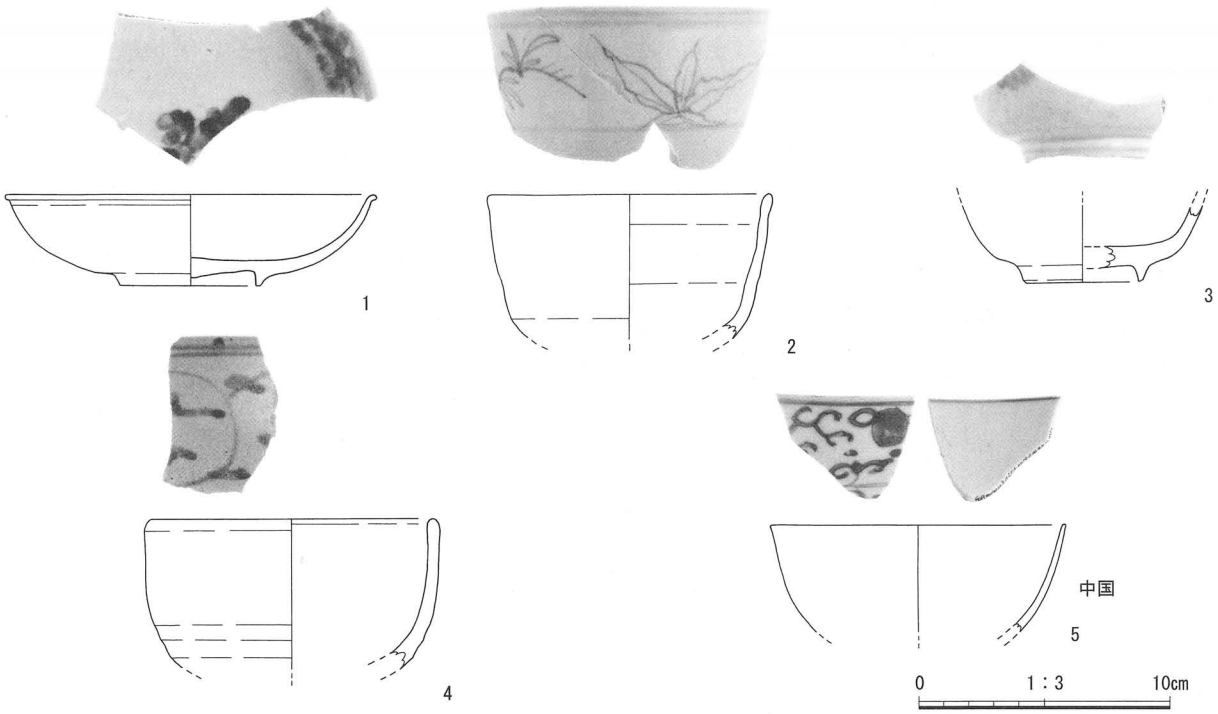
遺構外出土遺物（第2遺構面）（第24図）

以下は第2遺構面の遺構外で検出された遺物である。

1～4は肥前磁器である。1は皿で2は碗である。生産地年代はいずれも17C中頃にあたる。3はスタンプ文が施される碗である。九陶Ⅳ期を示す。4は陶胎染付碗で、生産時期は18C中頃までである。5は中国磁器の碗である。



第23図　遺構外出土遺物（第1~2遺構面）



第24図　遺構外出土遺物（第2遺構面）

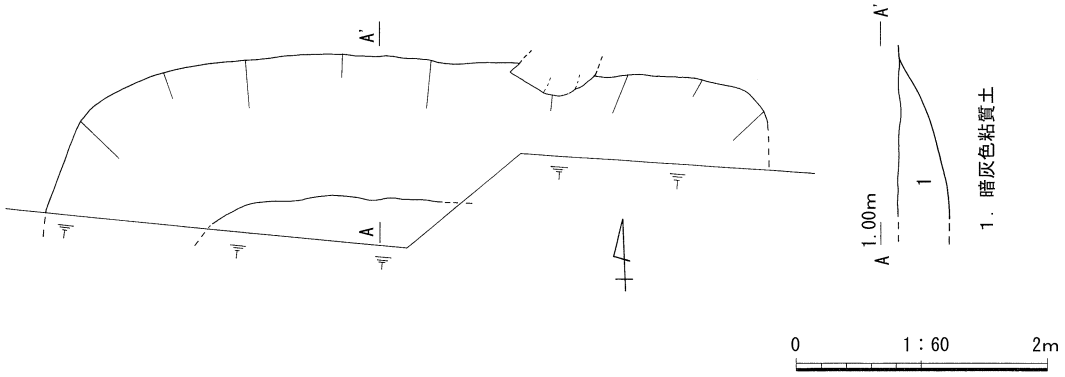
第４節　第3遺構面（第26図）

標高0.8～1.0ｍで検出した、黒褐色粘質土のブロックの混じる灰色細砂層（A層：第28図第3~5層）を基盤とする遺構面である。この面では土坑SK02、03、土坑群SK05～08、SK12～14、溝状遺構SD02、03 、04、05を検出した。

SK02（第25図）

調査区の南西側で検出された土坑である。この土坑は調査区外の南へ続いており、その一部を検出したものである。検出された範囲での遺構の東西幅は5.6m、深さは0.4mを測る。

遺構内からは土師器、陶磁器、木製品の他に動物遺存体（骨）が検出された。



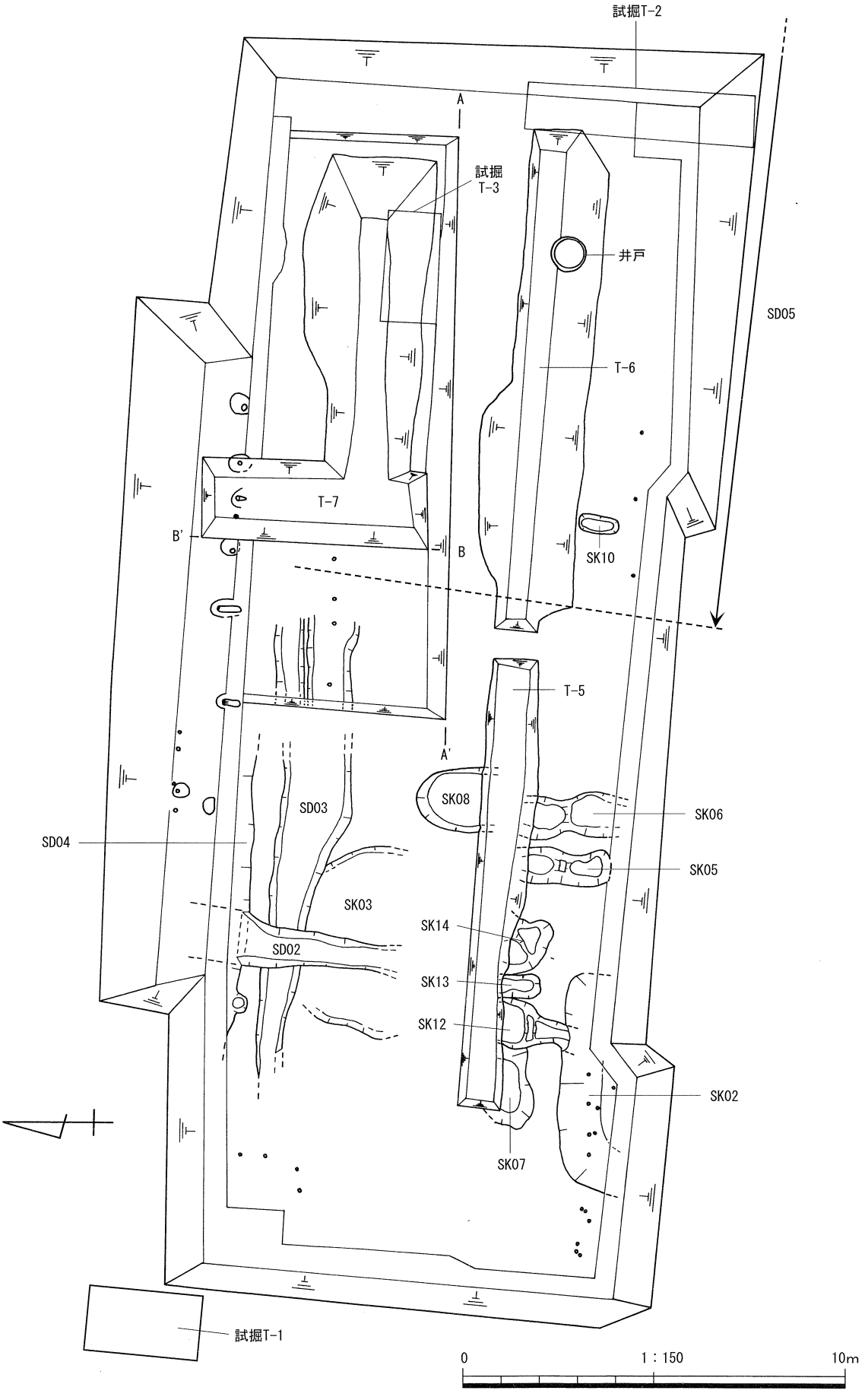
第25図　SK02平面図・断面図

SK02出土遺物（第27図）

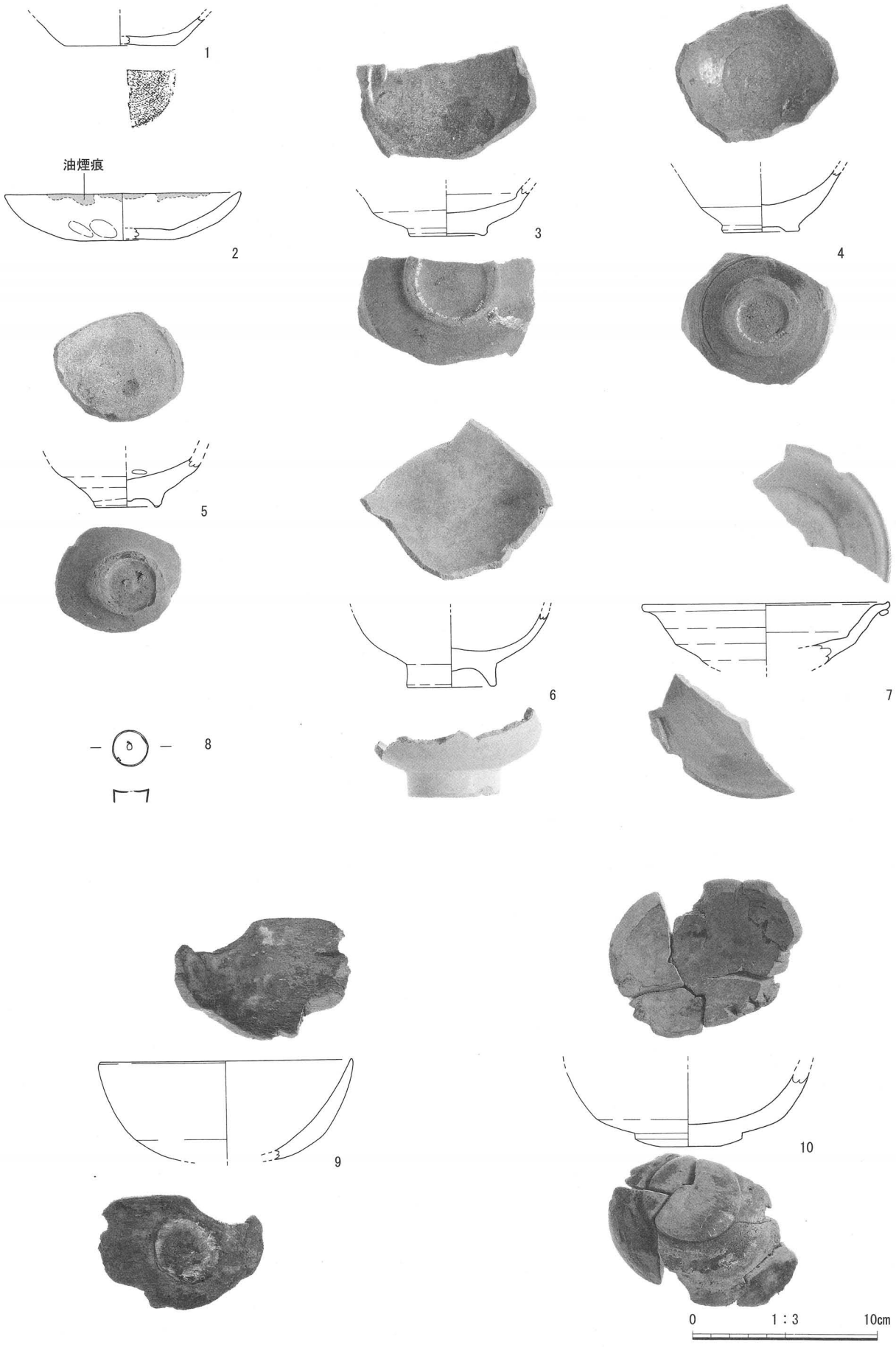
1はロクロ調整の土師器の皿である。回転糸切り痕が残る。2は手づくねの土師器の皿である。口縁端部に油煙痕が残ることから燈明皿として使用されたものであると考えられる。3～7は肥前陶器である。3は皿である。見込みに胎土目跡が残る。九陶Ⅰ-2期を示すものである。4は碗である。九陶Ⅰ-2期を示す。5は皿である。見込みに胎土目跡が残る。火を受けたものと思われる。九陶Ⅱ期を示す。6は呉器手の碗である。これも火を受けたものと思われる。九陶Ⅲ期を示す。7は溝縁皿である。九陶Ⅱ期を示すものである。口縁部に別個体の破片が付着している。

8は用途不明の金属製品である。部分的に黄銅色を呈する。

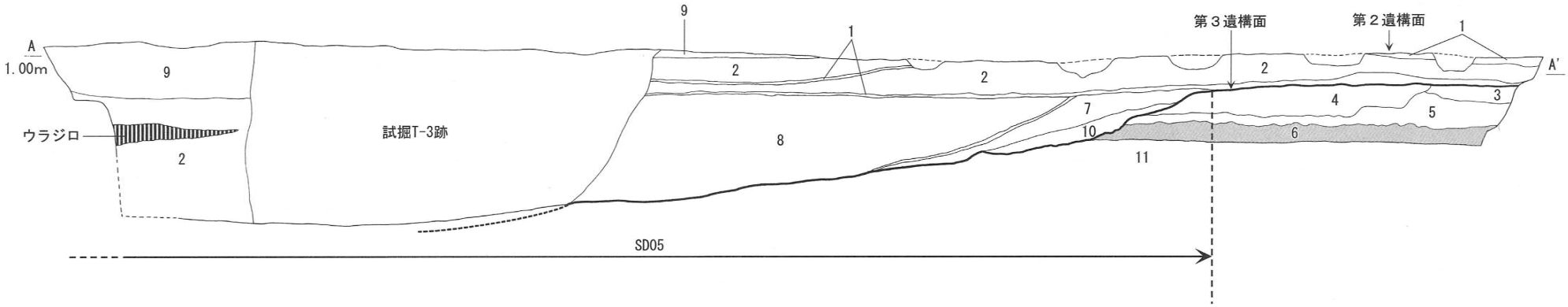
9は漆椀である。外面は黒漆塗り、内面は赤漆塗りが施される。10は漆椀である。外面は黒漆塗り、内面は赤漆塗りが施される。高台部分が削られており、別用途に転用された可能性がある。

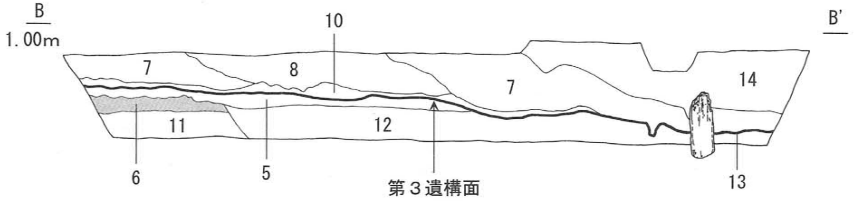


第26図　第3遺構面遺構配置図



第27図　SK02出土遺物





1．暗灰色粘土
2．緑灰色砂質土に明～淡褐色ブロック混じり
3．暗褐色土
4．灰色細砂層に黒褐色粘質土混じり
5．４とほぼ同じだが黒褐色粘質土の混じりが少ない
（第１造成土：Ａ層）
6．黒褐色粘質土（自然堆積層：第Ⅰ層）
7．灰白色砂質土に灰色砂質土ブロック混じり
8．黒褐色砂質土と灰白色砂質土ブロック、灰色砂質土ブロック、黒色土ブロックの混合土
9．暗灰色粘質土（廃棄工杭、瓦、遺物含む）
10．暗灰褐色砂質土（ウラジロ、遺物、木製品含む）
11．灰色細砂層（自然堆積層：第Ⅱ層）
12．灰色細砂層に黒褐色粘質土ブロックのやや大きめ混じり
13．暗青灰色砂粒質
14．暗灰褐色砂質土（ウラジロ、遺物、木製品含む）

0　1：60　2m

第28図　T-7土層断面図

SK03（第29図）

調査区の西側で検出された土坑である。平面形は半円形を呈する。遺構の規模は、遺構上端で東西約5m、南北1.7m以上を測る。深さは0.25mと浅く、底部は平坦である。遺構内からは、土師器、陶磁器、石製品、古銭、金属製品、木製品が検出され、その他には、多数の動物遺存体（骨）が検出された。

遺構の埋土を掘り下げると、中央に南北方向の溝状の落ち込み（SD02）があることが分かったが、新旧関係は不明である。

SK03出土遺物（第30、31図）

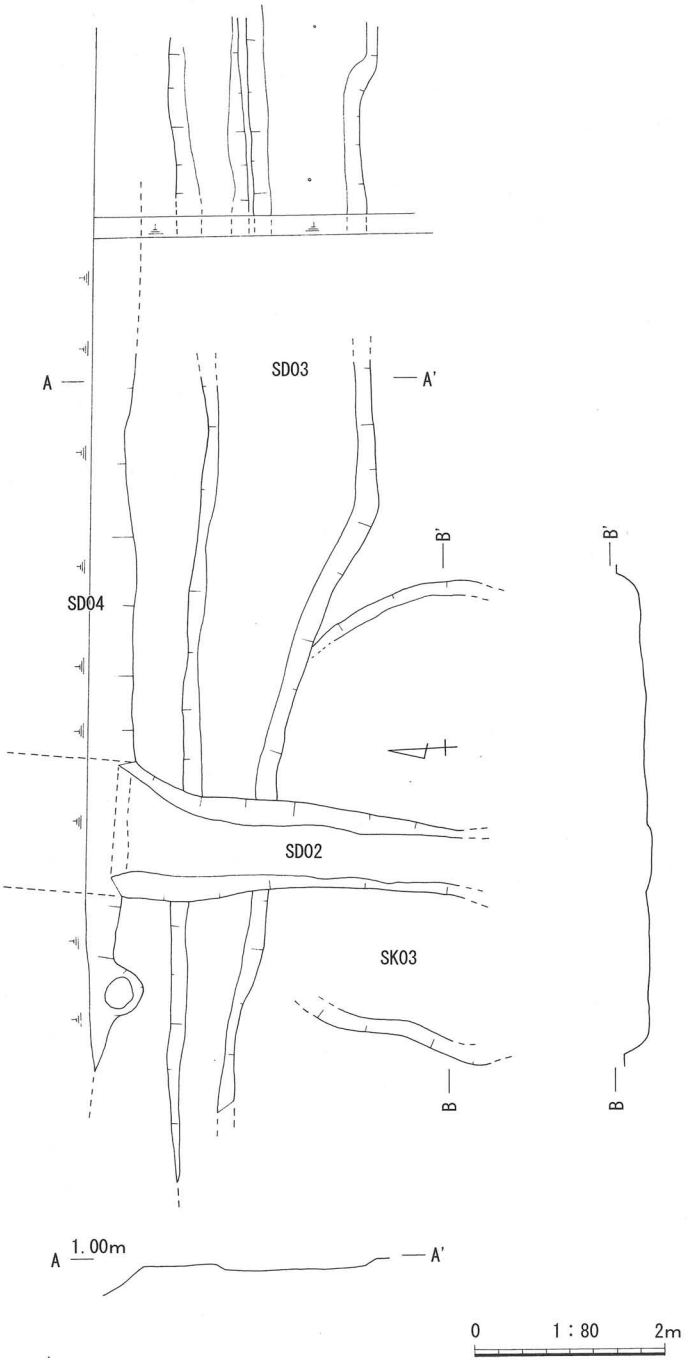
1は土師器の皿である。回転糸切痕が残る。口縁部に油煙痕が残ることから燈明皿として使用されたものと思われる。2は三島手の皿である。九陶Ⅲ期（1650年～1690年）にあたる。3は志野の皿である。4は肥前磁器の碗である。九陶Ⅱ-2期を示す。5は肥前陶器の碗である。九陶Ⅲ期を示す。6は肥前陶器の皿である。見込みに砂目跡が残る。7は碗である。九陶Ⅰ-2～Ⅱ期を示す。8は碗である。九陶Ⅱ期を示す。9は京焼風の碗である。九陶Ⅳ期（18C前半）を示す。10は擂鉢である。外面の一部に別個体の胎土が付着する。九陶Ⅱ期を示すものである。

11は全体が金属製の煙管である。磁石には反応しない金属である。

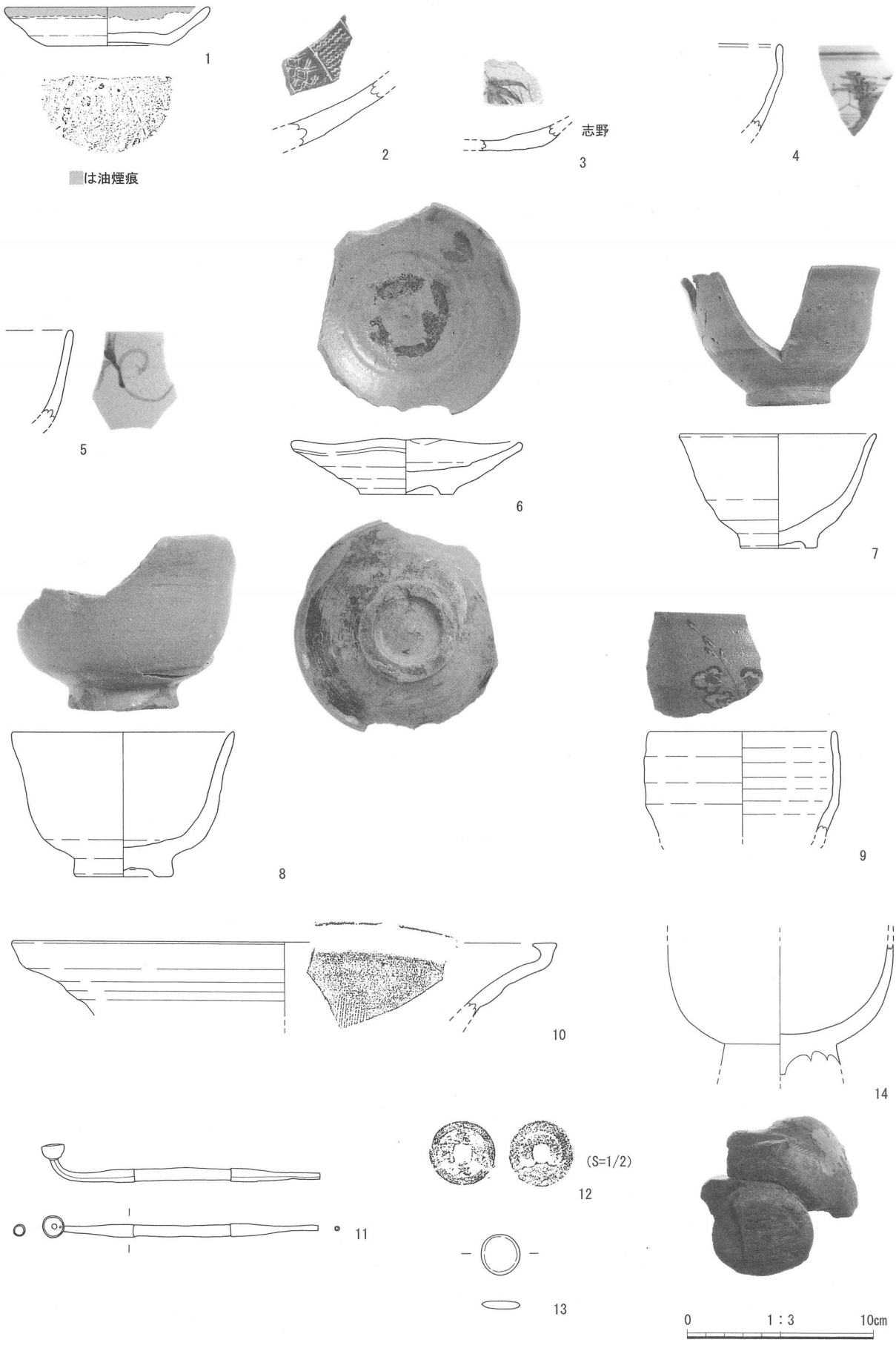
12は銭貨である。錆が多いため銭種の判別は難しい。「□元□寶」と読みとれる。

13は石製の碁石で、黒色を呈する。

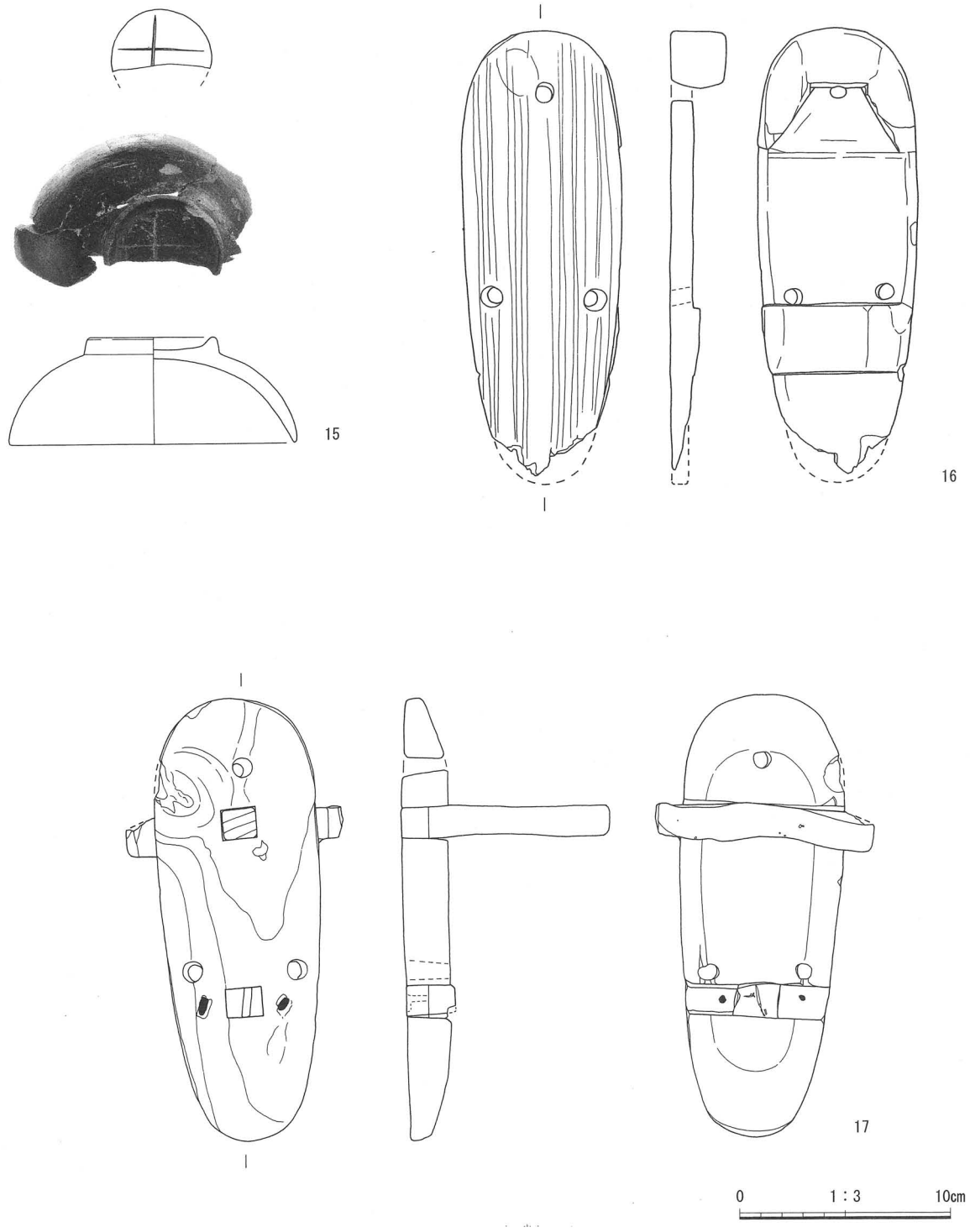
14は漆椀である。内面は赤漆塗り、外面は黒漆塗りに赤絵文様が描かれる。15は漆椀の蓋である。内面



第29図　SK03、SD02、SD03、SD04平面図・断面図



第30図　SK03出土遺物(1)



第31図　SK03出土遺物(2)

は赤漆塗り、外面は黒漆塗りが施される。つまみ内部に十文字の刻印が見られる。

16は丸型の刳り下駄である。前緒穴の付近には指跡が残る。後の歯は擦り減っている。17は丸型の差込下駄である。前緒穴付近には指跡が残る。後の歯は枘から下が欠損するが、木製の楔と鉄釘で固定されていたことが分かる。

SK05（第32図）

調査区南西側で検出された土坑である。遺構の規模は、長軸が南北2.14m以上、短軸が東西0.8～1.0mを測る。深さは0.16～0.25mを測る。

遺構の埋土からは土師器の皿の小片が1点と、動物遺存体（骨、貝殻）が検出された。

SK05出土遺物（第33図-1）

1は手づくねの土師器の皿である。口縁端部に油煙痕が残ることから、燈明皿として使用されたものと考えられる。

SK06（第32図）

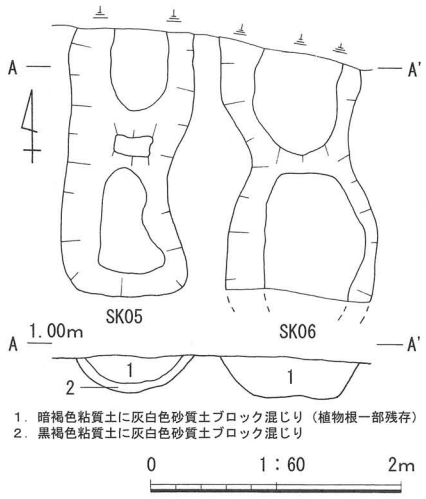
調査区南西側、SK05の東で検出された土坑である。遺構の長軸はSK05と同様に南北方向を向き、規模は長軸で南北1.9m以上、短軸が東西0.8～1.2mを測る。深さは0.29～0.33mを測る。

遺構の埋土からは土師器片と陶器片の他に、動物遺存体（貝殻）が1点検出された。

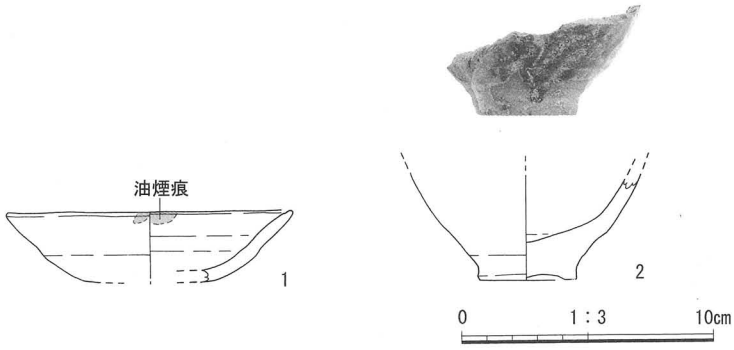
SK06出土遺物（第33図-2）

2は肥前陶器の碗である。九陶Ⅰ-2～Ⅱ期にあたるものである。

この他に器種不明の陶器と土師器が検出されたが、いずれも微細片であった。



第32図　SK05、06平面図・断面図

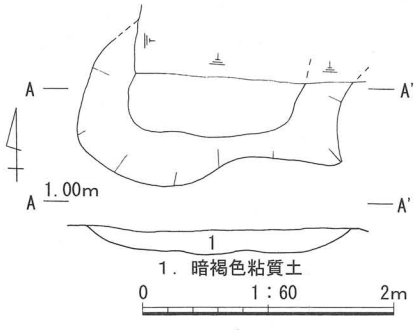


第33図　SK05、06出土遺物

SK07（第34図）

調査区の南西側で検出された土坑である。規模は、南北0.65m以上、東西2.1m、深さは0.19mを測る。

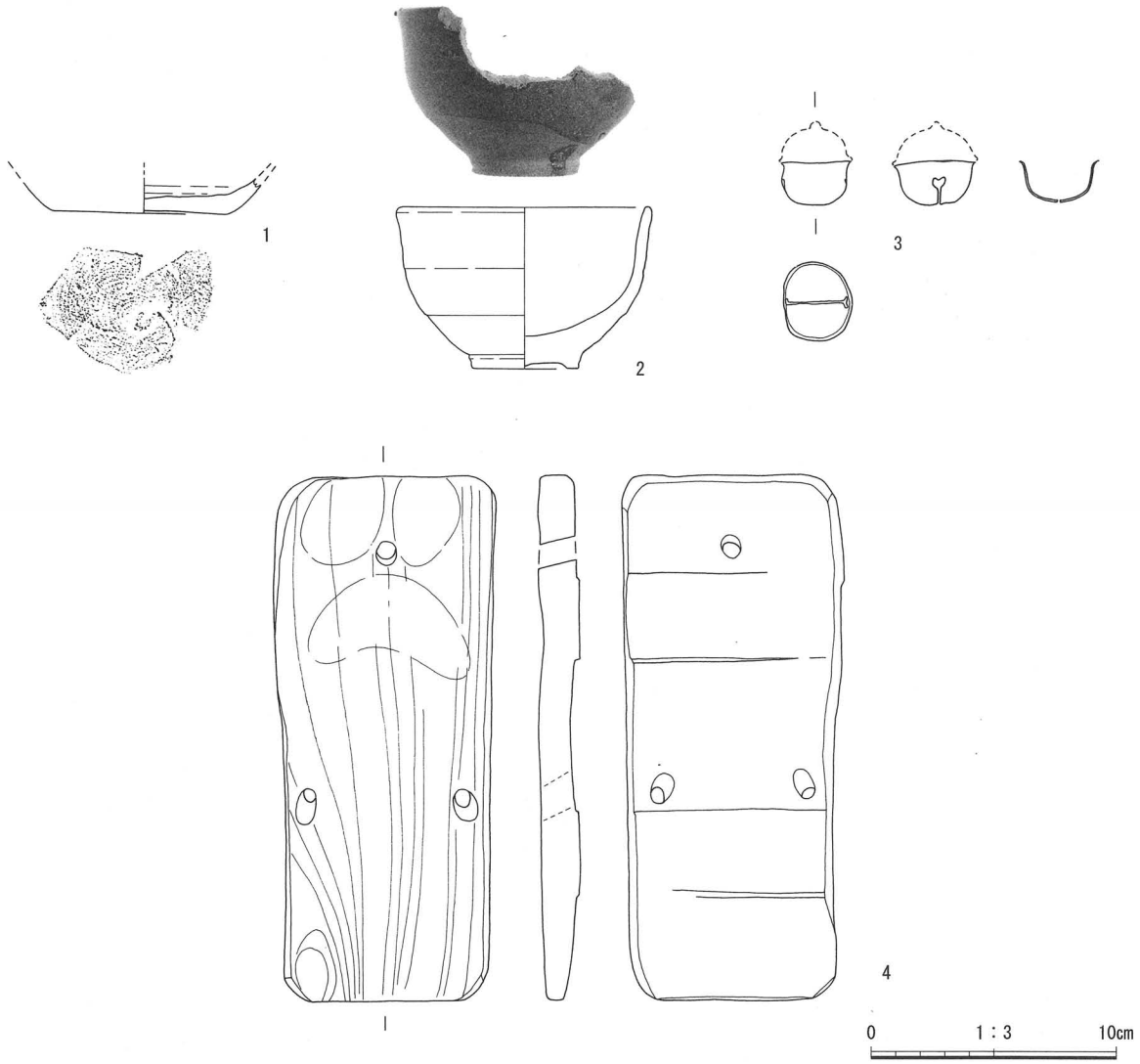
遺構中から土師器、陶器、金属製品、木製品の他、動物遺存体（骨）が1点検出された。



第34図　SK07平面図・断面図

SK07出土遺物（第35図）

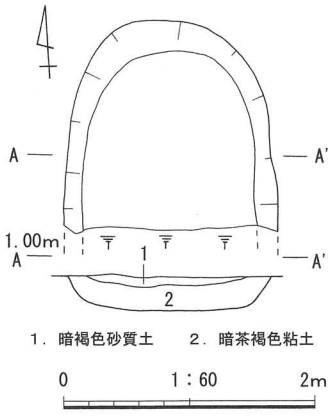
1はロクロ成形の土師器の皿である。底部には回転糸切り痕が残る。全体が黒色を帯びている。2は肥前陶器の碗である。九陶Ⅰ-2～Ⅱ期を示すものである。3は金属製の鈴である。材質は不明であるが、非鉄金属製である。4は角型の連歯下駄である。前緒穴の付近に指跡が残る。使い込まれており歯は殆どが磨滅している。



第35図　SK07出土遺物

SK08（第36図）

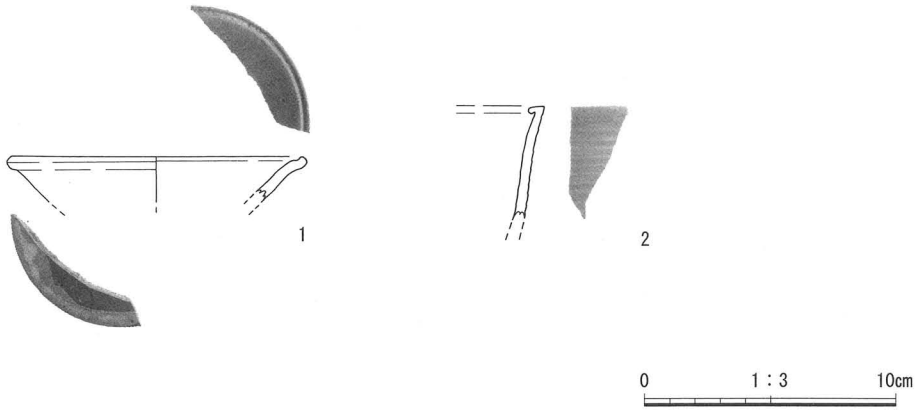
調査区中央のやや西寄りで検出された土坑である。遺構の規模は南北1.66m以上、東西1.7m、深さは0.26mを測る。遺構埋土からは陶器片が検出された。



第36図　SK08平面図・断面図

SK08出土遺物（第37図）

1は肥前陶器の溝縁皿である。九陶編年でⅡ期を示すものである。2は肥前陶器の香炉か火入れである。

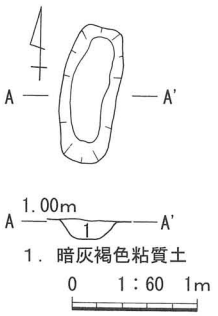


第37図　SK08出土遺物

SK10（第38図）

調査区南東側で検出された土坑である。平面形は、隅丸長方形を呈する。遺構の規模は長軸が南北1.1m、短軸が東西0.45m、深さは0.1～0.19mを測る。

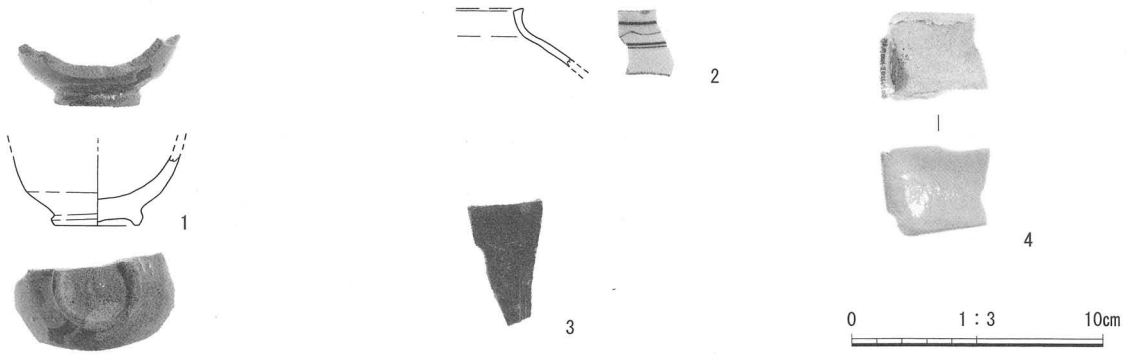
遺構の埋土からは陶磁器が検出された。



第38図
SK10平面図・断面図

SK10出土遺物（第39図）

1は唐津の小碗である。九陶Ⅰ-2～Ⅱ期を示すものである。2は京・信楽系陶器の土瓶の口である。生産時期は18C後半以降のものである。3は肥前陶器の擂鉢である（写真：内面）。4は肥前磁器の水滴の底部である。内外面に布目跡が残る（写真上：内面、下：外面）。



第39図　SK10出土遺物

SK12、13、14（第40図）

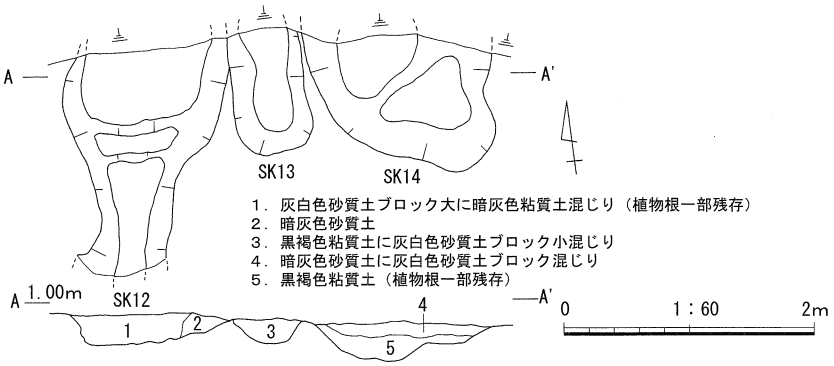
SK12、13、14は調査区の南西側で接する形で検出された土坑である。

SK12の規模は南北1.8m以上、東西0.6m～1.3m、深さは0.13mを測る。

SK13の規模は南北1.0m以上、東西0.7m、深さは0.08mを測る。

SK14の規模は南北1.2m以上、東西1.5mを測り、深さは0.12～0.25mを測る。

いずれの遺構中からも遺物は検出されなかった。



第40図　SK12、SK13、SK14平面図・断面図

SD02（第29図）

調査区の北西側で検出された性格不明の南北方向の溝状遺構である。この遺構はSK03の埋土を掘り下げた際に検出されたものである。遺構の規模は東西0.7～1.4m、南北3.5m以上、深さは北側で最大0.13mを測る。北側の土層断面から、この遺構がさらに北側に続いていることが分かった。

遺構中からは遺物は検出されなかった。

SD03（第29図）

調査区北側の西から中央で検出された性格不明の東西方向の溝状遺構である。遺構の長さは東西12.4m、中央部での深さは検出面から0.1mを測る。遺構上端の幅は西端で0.7mを測り、東に向うに従って広がり、中央部では1.8mを測る。遺構東側では溝は2筋になっており、北側の上端幅は0.75m、南側は1.37mを測る。

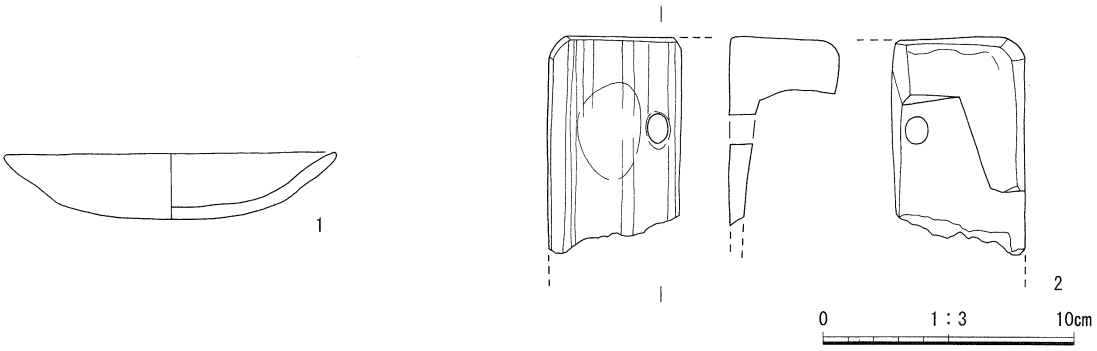
遺構埋土からの遺物は少なく、土師器と下駄がそれぞれ1点検出された。

SD03出土遺物（第41図）

1はロクロ成形の土師器の皿である。内外面の底部にはナデが施されているが、回転糸切り痕が僅かに残る。2は角型の刳り下駄である。前緒穴付近に指跡が残る。

SD04（第29図）

調査区北西側で検出された北側に落ち込む掘り込みである。調査区内で確認出来たのは南側の上端部であり、東西方向、及び北側の規模は掴めていない。試掘調査において、本調査区外の西方に設定されたトレンチで同様の落ち込みが確認されており、この遺構と繋がる可能性がある。



第41図　SD03出土遺物

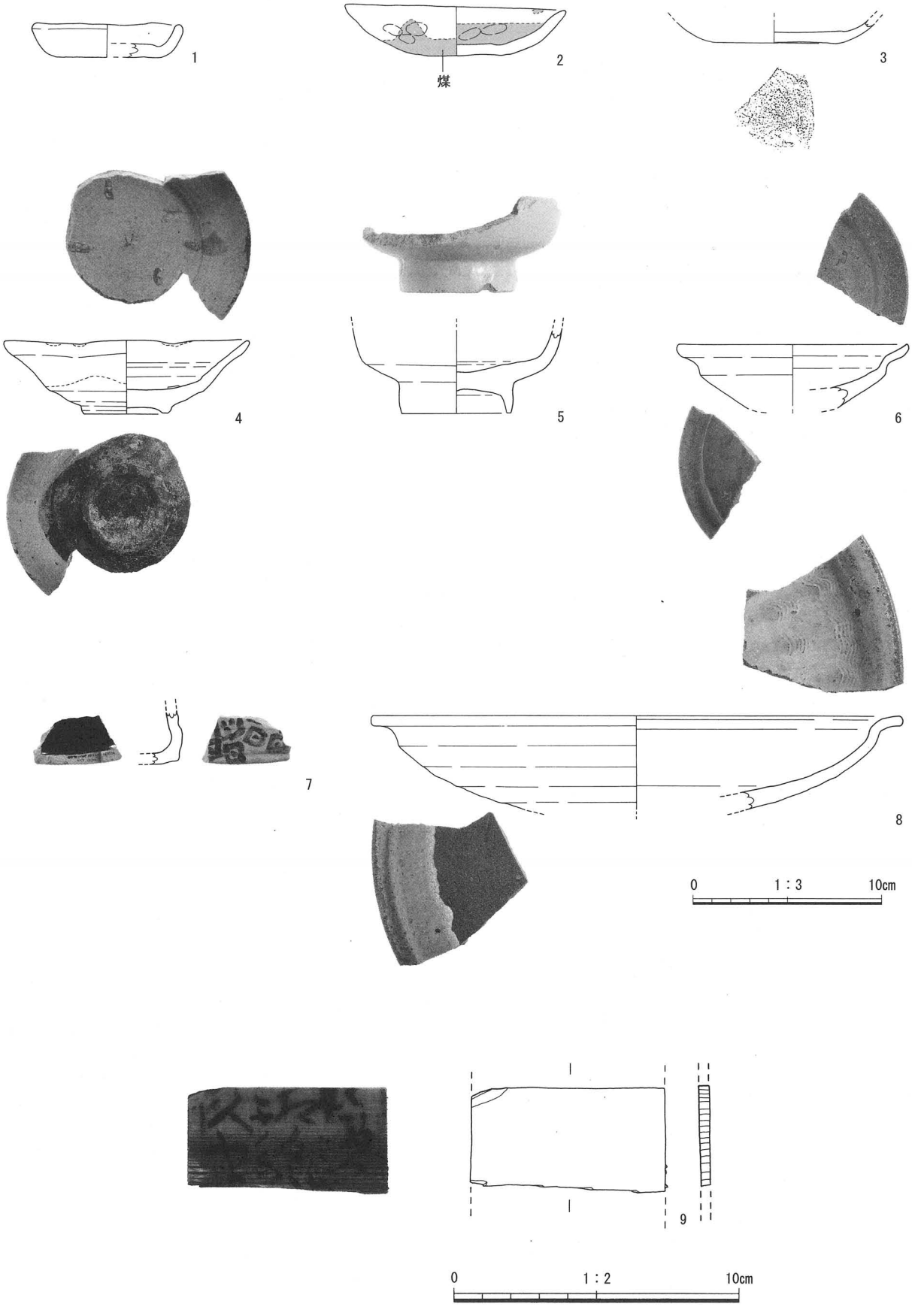
遺構内からは、土師器、陶磁器、木製品、瓦の他、多数の動物遺存体（骨類、貝殻）が検出された。

SD04出土遺物（第42、43図）

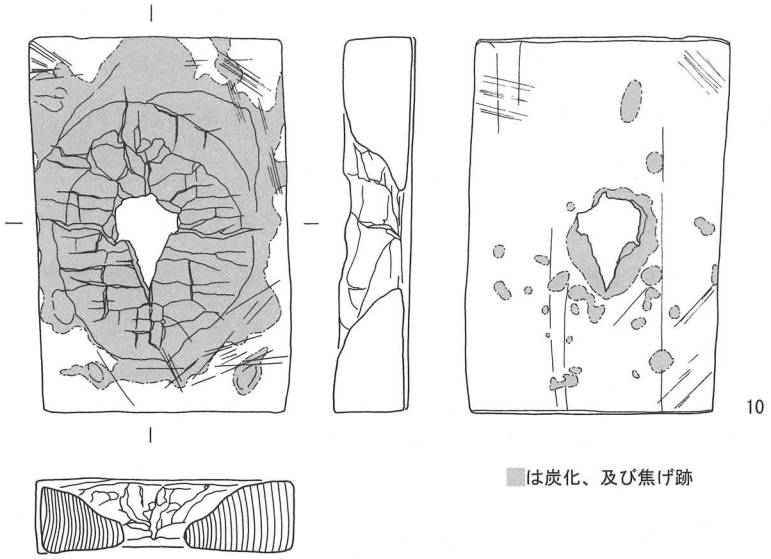
1は手づくねの土師器皿である。2は手づくねの土師器皿である。内外面には煤が付着する。3はロクロ調整の土師器の皿である。底部に回転糸切痕が残る。4は肥前陶器の皿である。見込みには胎土目跡が残る。口縁端部には油煙痕が残り燈明皿に転用されたものと思われる。九陶Ⅰ-2期を示す。5は肥前陶器の碗である。九陶Ⅱ期を示す。6は肥前陶器の皿である。九陶Ⅰ-2期を示す。7は黒織部である。8は肥前陶器の皿である。器の表面が白色を帯びており火を受けたものと思われる。九陶Ⅱ～Ⅲ期にあたるものである。9は上下が欠損する木板である。片面には墨書があり、「く物ハ　□ハゝ□相□ゝ　ふノくつ　人ヤ」と読める。10は木板で中心部が炭化して穴が開いている。11は木製の片刃のヘラである。12は棟込瓦で、コビキBである。13は丸瓦で、コビキBである。

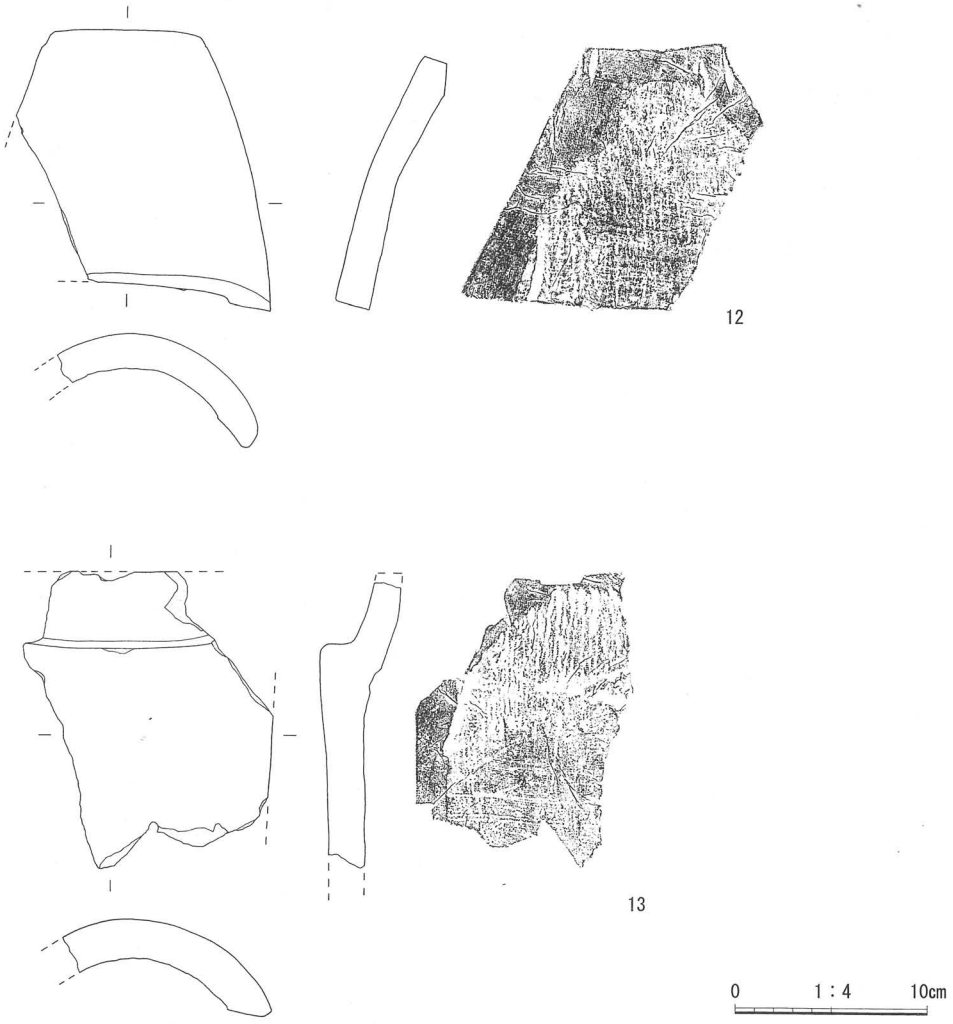
SD05（第26図）

調査区の東側で、第1造成土（A層）と自然堆積層が人為的に深く掘り込まれた大規模な地形の落ち込みを確認した。この遺構は調査区の東側に設定した2箇所のトレンチ（T-6、T-7）の東西土層断面で捉えたものである（P.14 第12図、P.25 第28図）。土層を観察すると、調査区の中央からやや東寄りの地点から第1造成土が掘り込まれ、東に向かうに従って更に下層へと深く掘り込まれていることが分かった。調査区内で計測が出来た落ち込みの深さは標高-0.77mを測り、第3遺構面との比高は約1.4mになる。遺構底面のレベルは東に向かって更に落ち込んでおり、最深部を探る必要があったが、トレンチの深さが現地表面から約2.7mと深く、また埋土が非常に脆弱であったことから安全面に配慮し調査を中止した。遺構内の埋土の堆積状況を観察すると、西から東に向けて纏まった量の土が入れられていた。また、埋土中には地盤を固めるためか、所々に多量のウラジロが入れられていた。最も西側で見られる埋土には遺物が多く含まれ、陶磁器や木製品、野地板等の木片や動物遺存体（骨）とウラジロが検出された（第12図 第12層、第28図 第10層）。



第42図　SD04出土遺物(1)

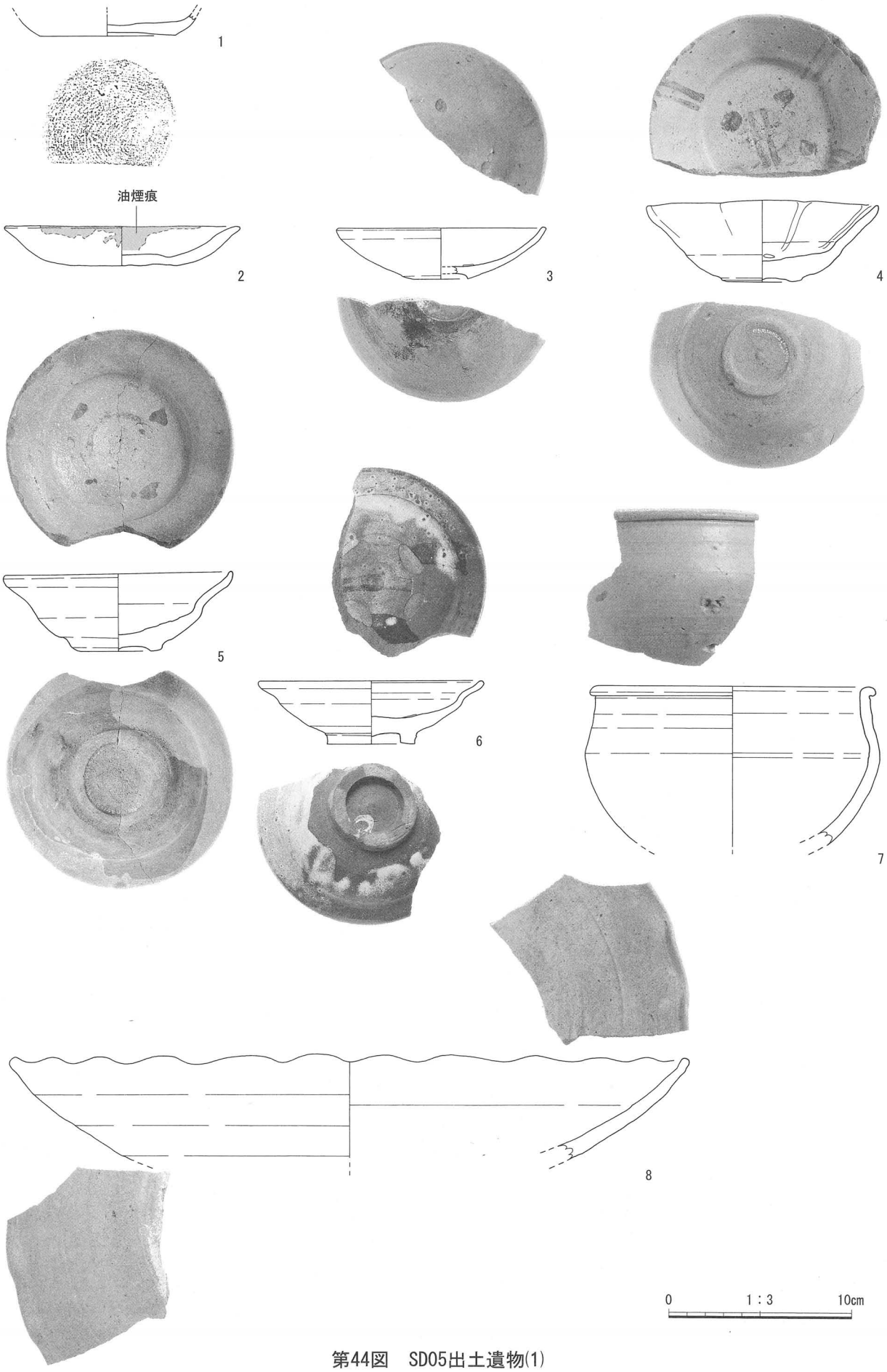




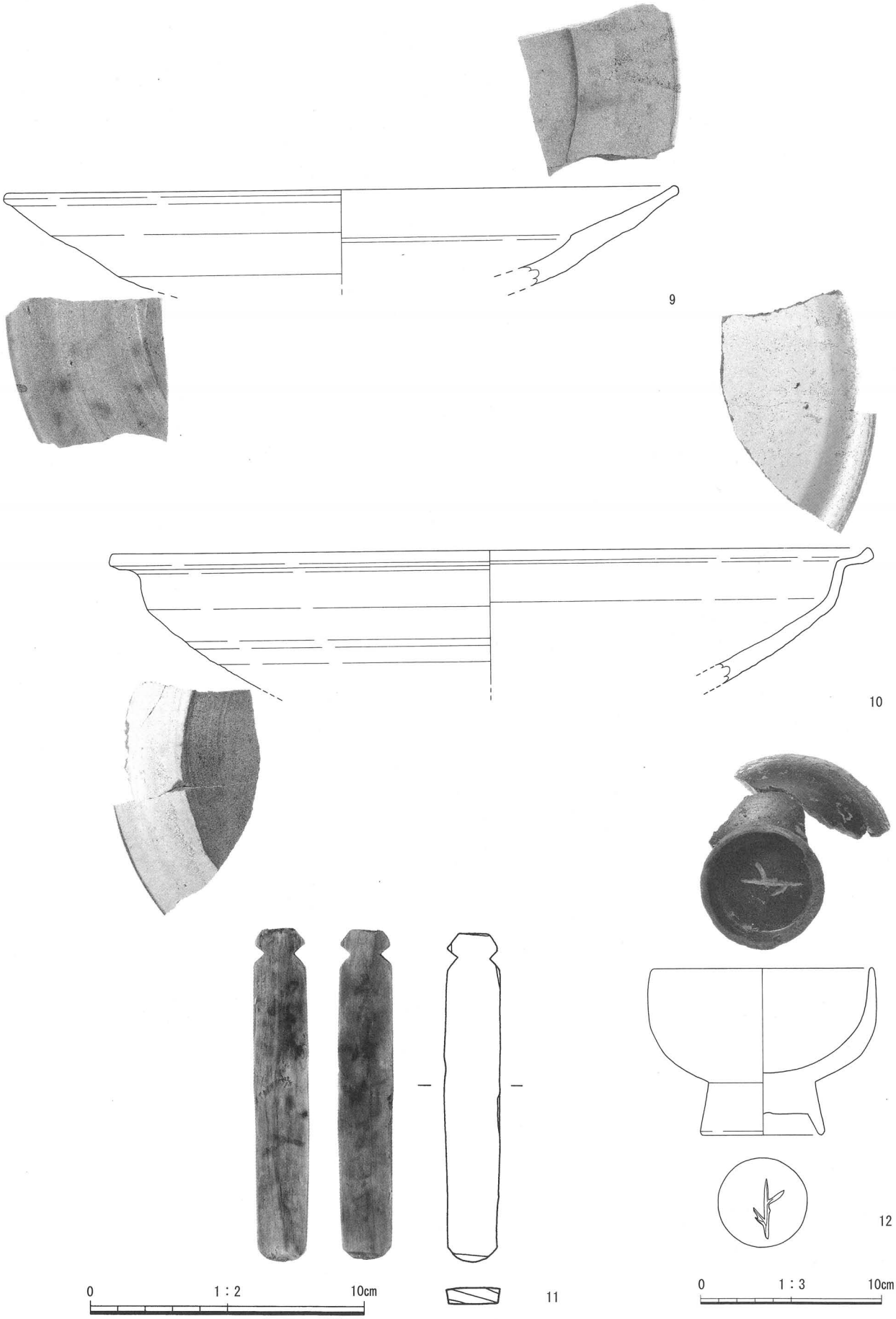
第43図　SD04出土遺物(2)

SD05出土遺物（第44図~第47図）

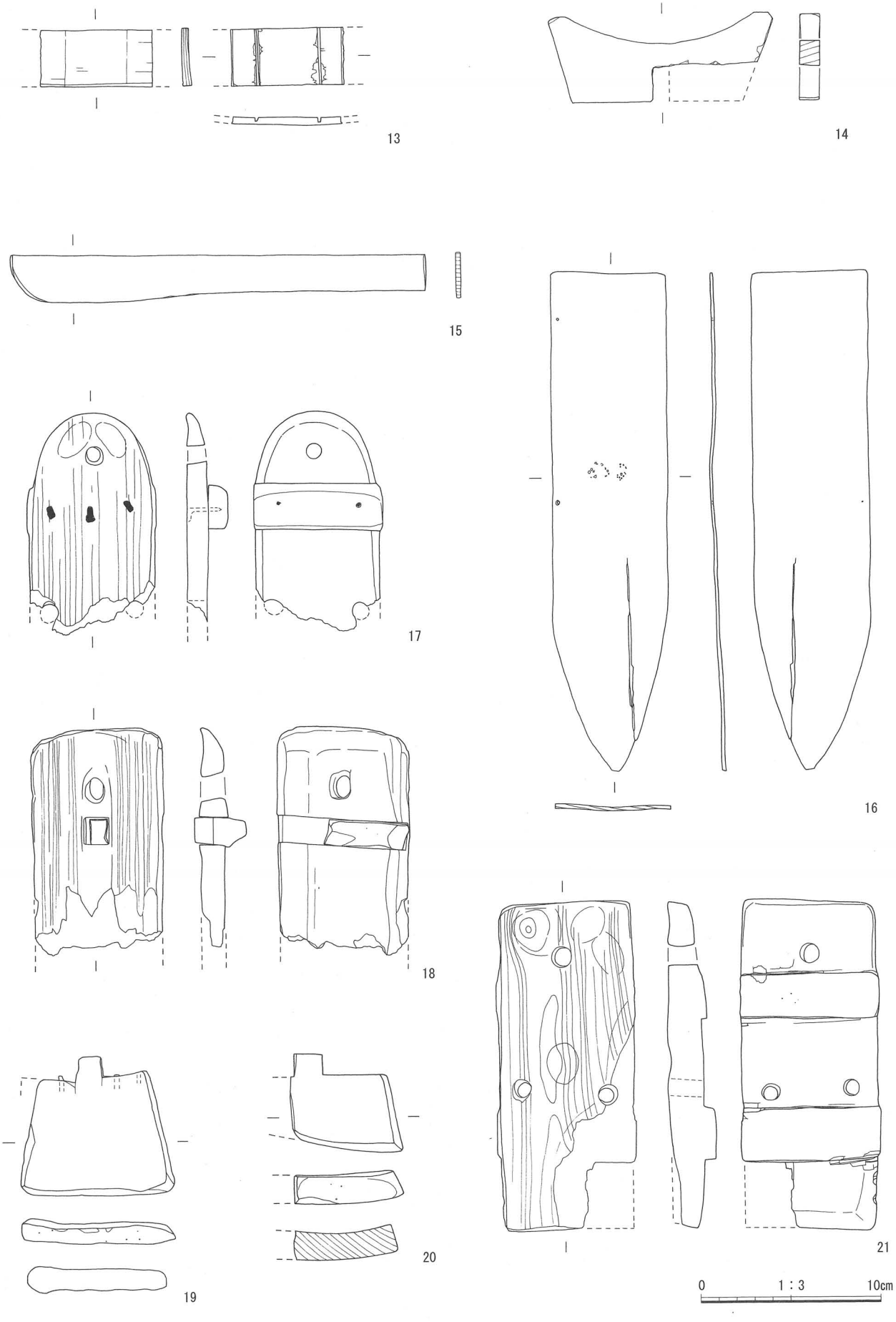
1はロクロ成形の土師器の皿である。回転糸切り痕が残る。2は手づくねの土師器の皿である。口縁部に油煙痕が残ることから燈明皿として使用されたものと思われる。3～8は肥前陶器である。3は皿である。見込みに胎土目跡が残る。九陶Ⅰ-2期を示す。4は絵唐津の皿である。見込みに胎土目跡が残る。5は皿である。見込みに胎土目跡が残る。6は絵唐津の皿である。見込みと高台に胎土目跡が残る。7は片口である。8～10は肥前陶器の大皿である。いずれも釉薬が白く変色しており火を受けたものと考えられる。11は両面に墨書のある荷札木簡である。片面には送り主の住所と名「今市中町[註1]嘉兵衛」と書かれている。もう片面には荷の品目が書かれたものと思われ「□□□□□□入」と書かれている。12は漆椀である。内面は赤漆塗り、外面は黒漆塗りが施される。高台内に刻印が見られる。13は用途不明の木製品の部材である。14は木製の器台と思われる。15は木製のヘラである。刃は先端部の両面に僅かに加工痕が見られるだけである。16は用途不明木製品である。二箇所に小さな穿孔が開けられている。17は丸型の連歯下駄である。前緒穴付近に指跡が残る。歯は3本の鉄釘で固定され修復されている。18は角型の差込下駄である。19、20は差込下駄の歯である。21～24は連歯下駄である。21は角型で、歯は磨滅している。22は角型である。後側の歯が多く磨滅している。23は丸型で緒穴付近に指跡が残る。24は丸型で歯の周囲に黒漆が残る。前側に緒穴とは別の穴が1つ開けられている。25は丸型の差込下駄である。幅が極端に狭い形状である。残存する前の歯は極端に偏って磨滅しており、4本の鉄釘で固定されている。26は棟込瓦である。コビキBである。27は軒丸瓦である。右三巴文が中央に入りその周囲には珠文が廻っている。



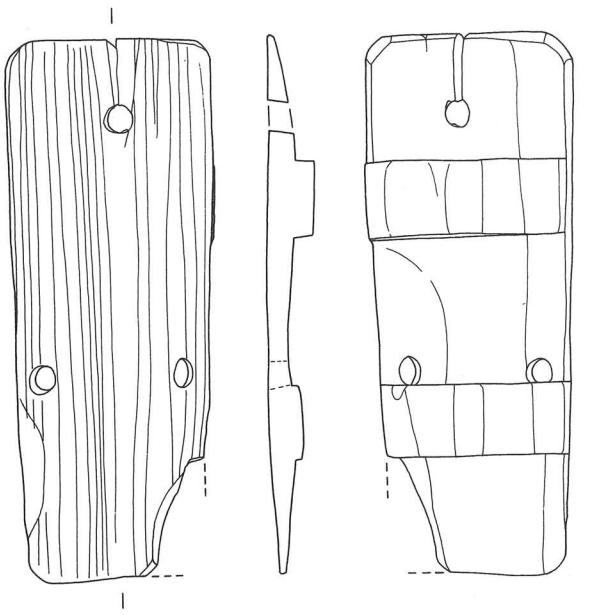
第44図　SD05出土遺物(1)



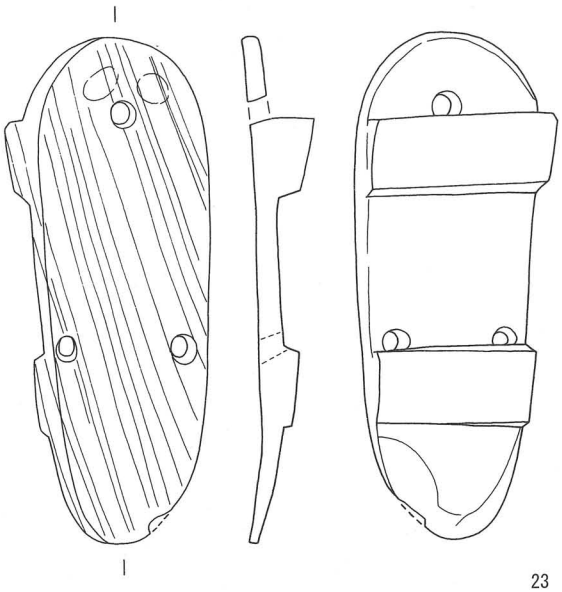
第45図　SD05出土遺物(2)



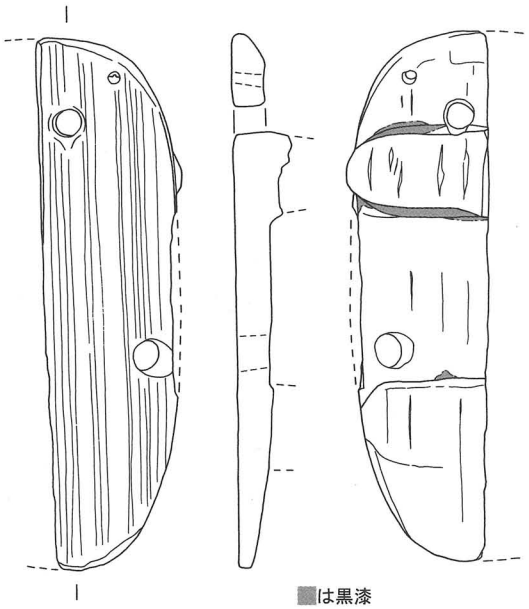
第46図　SD05出土遺物(3)



22

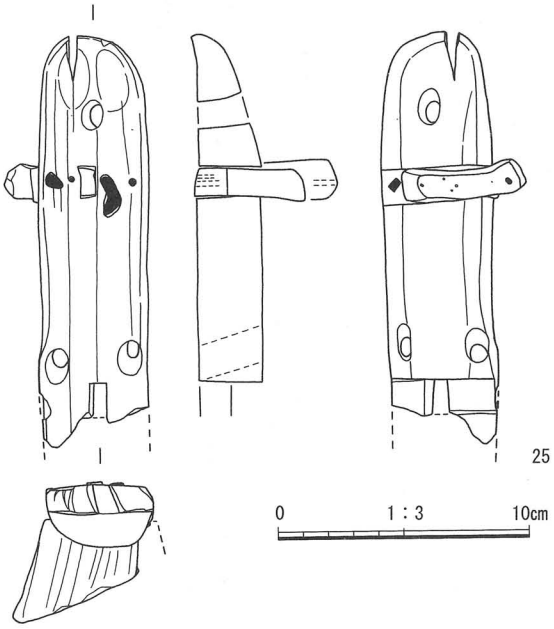


23



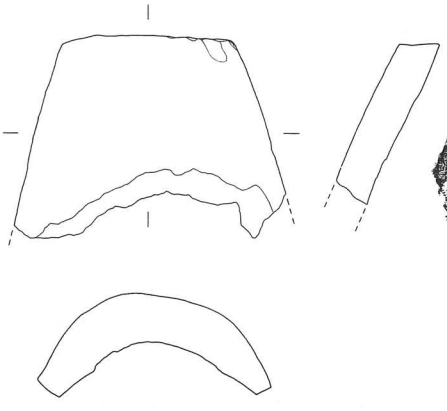
■は黒漆

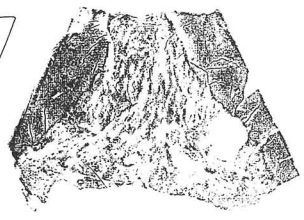
24



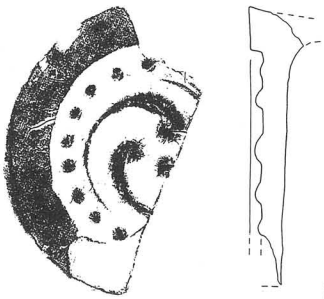
25

0　1：3　10cm





26



27

0　1：4　10cm

第47図　SD05出土遺物(4)

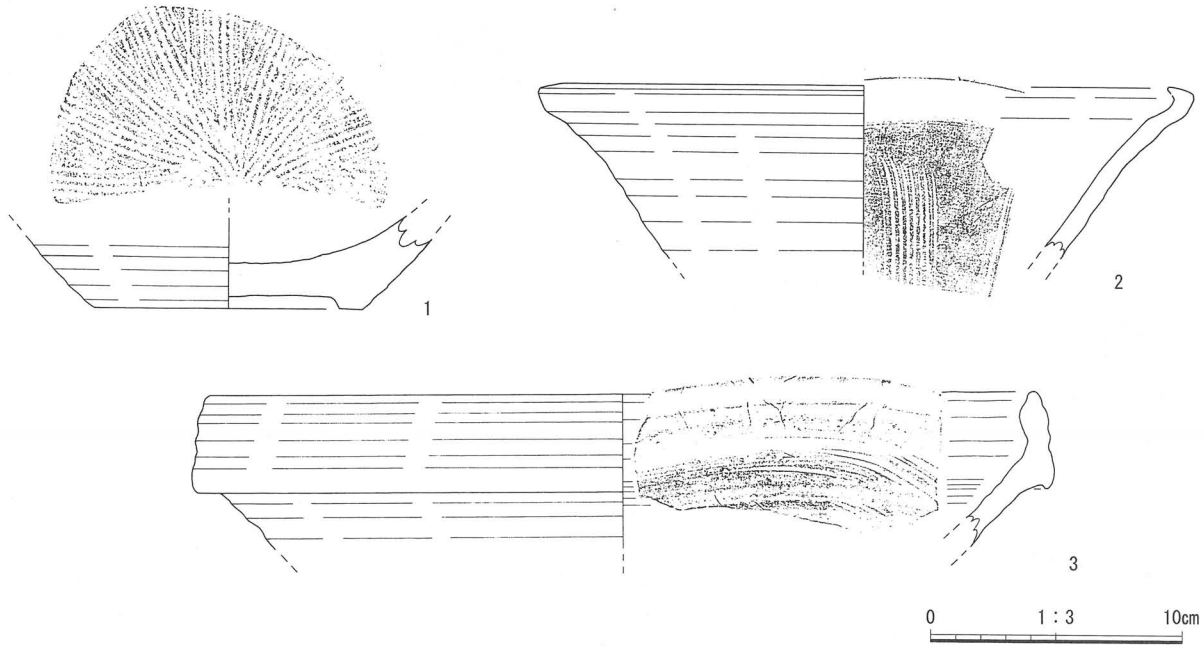
遺構外出土遺物（第2~3遺構面）（第48、49図）

以下は第2遺構面から第3遺構面に至る遺物包含層から検出された遺物である。

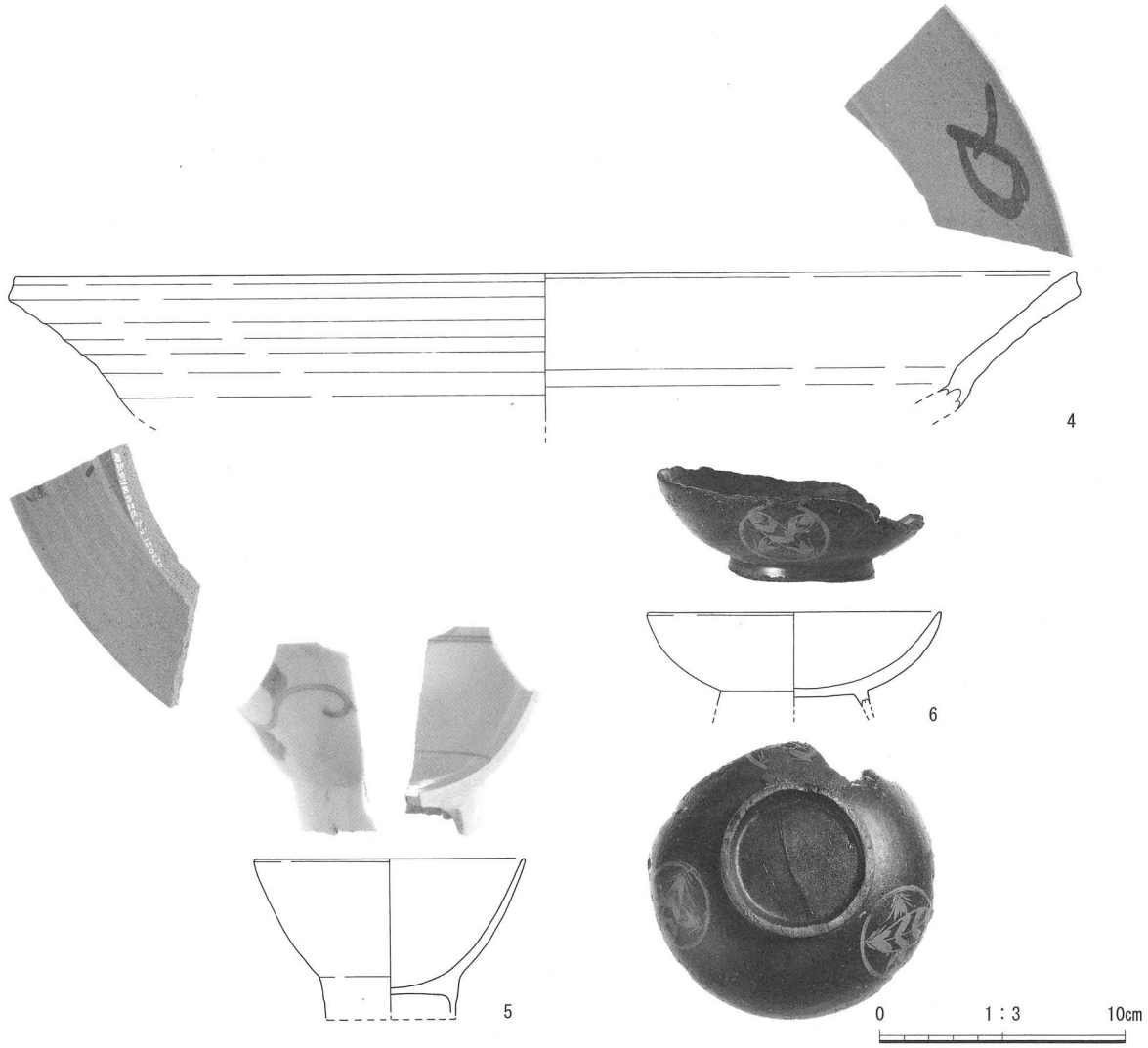
1、2、3は備前系の擂鉢である。1と2はスリ目の単位は8本である。3はスリ目の単位は不明である。推定口径32.9cmを測る。4は絵唐津の大皿である。九陶Ⅰ～Ⅱ期にあたる。5は肥前磁器の広東碗である。6は漆椀である。内面は赤漆塗り、外面は黒漆塗りに赤漆で「丸に右重ね違い鷹の羽」紋が3箇所に描かれる。

遺構外出土遺物（第3遺構面）（第50図）

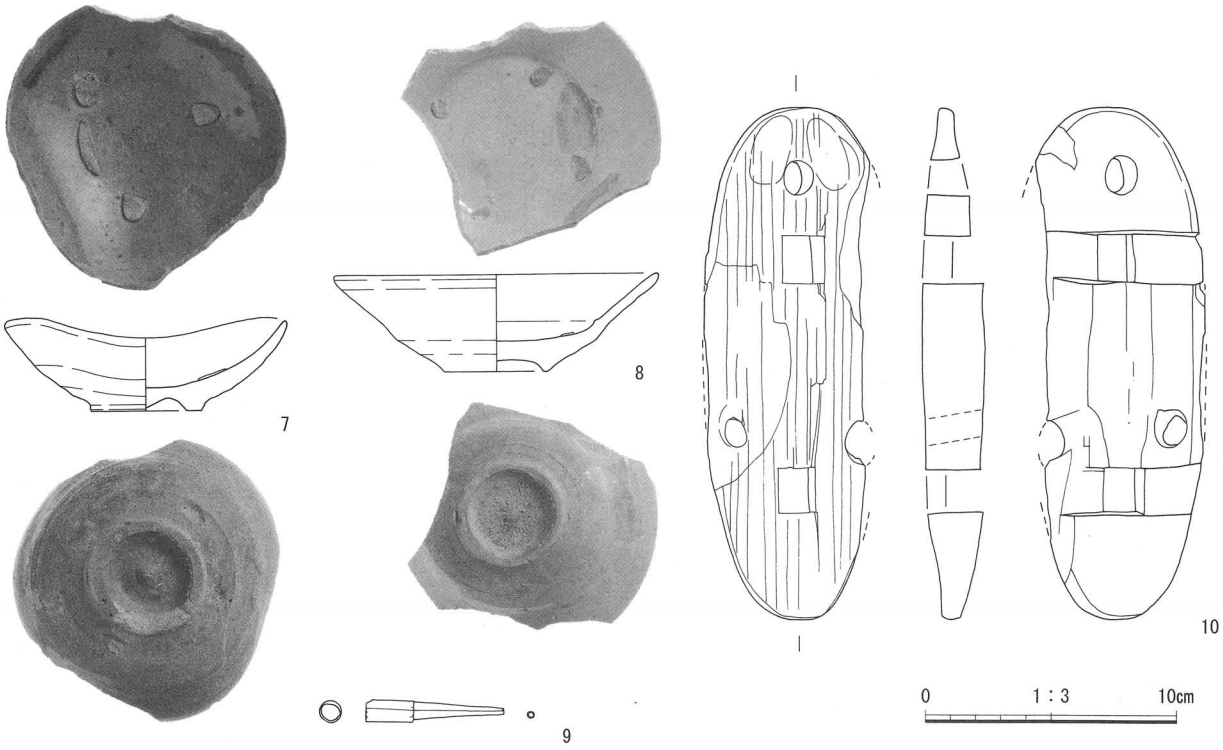
7、8は肥前陶器の皿である。いずれも見込みに胎土目跡が残り、九陶Ⅰ-2期にあたるものである。9は金属製の煙管の吸口である。材質は未分析のため不明であるが、非鉄金属である。10は丸型の差込下駄である。前緒穴付近に指跡が残る。



第48図　遺構外出土遺物（第2~3遺構面）(1)



第49図　遺構外出土遺物（第2~3遺構面）(2)



第50図　遺構外出土遺物（第3遺構面）

第５節　自然堆積層について

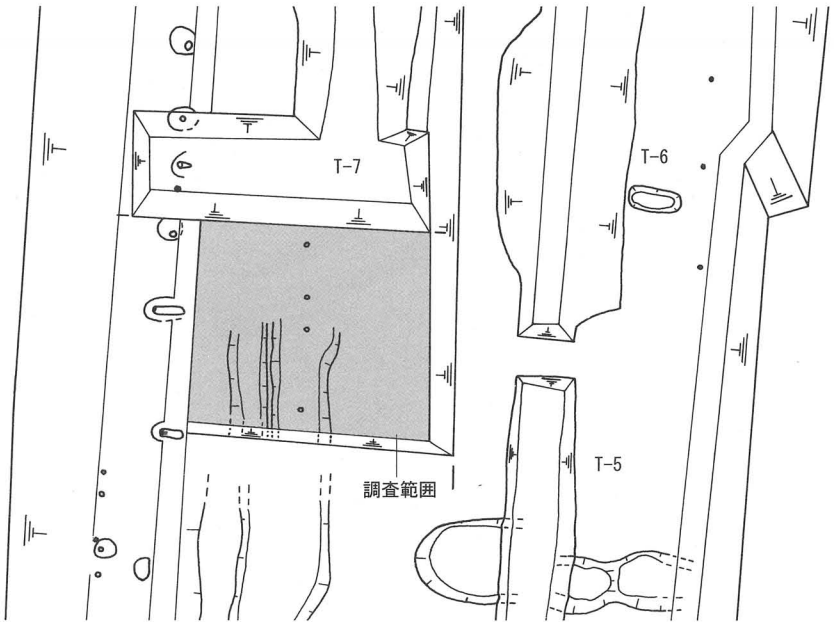
松江城下町の最初の造成土である第1造成土（A層）の下には旧表土層（第Ⅰ層）が堆積している。

この土層は、現在の城下町遺跡の発掘調査を行う上で、自然堆積土と造成土を見分けるための鍵層となっている。

この土層の検出されるレベルは場所によって異なる。これまでの多くの調査事例がある城山北公園線改良工事予定地内の城下町遺跡では、その検出される標高は松江城に近い場所で高く、東に向かうに従い低くなる。本調査地で第Ⅰ層が確認されたレベルはT-5西端で標高0.60m、T-6西側で0.40mであり、東西距離約15mの間に0.20mの標高差が生じている。旧地形は東に向かって緩やかに下がっていたと考えられる。

今回の調査では、調査区中央の一定の範囲のA層を除去し、旧表土の第Ⅰ層上面を露わにした（第51図）。そして、検出レベルを確認すると共にこの面の状態を精査したところ、堆積土が攪拌されたかのように乱れている状態を確認した。

明らかな痕跡は見えないが、人間が足を踏み入れて足跡が残った可能性がある。本遺跡から北東に約250m離れた松江城下町遺跡（母衣町180-28、180-29）[註2]では、旧表土面で水田跡と人間の足跡が確認されている。残念ながら今回の調査においては調査範囲も狭く水田の痕跡は確認出来なかったが、造成以前の旧表土面が人為的に乱されている状況から、本調査区の周辺も城下町の造成以前は同じように水田であった可能性も考えられる。



第51図　自然堆積層の調査範囲図

第６節　出土した動物遺存体について

今回の調査で、第2遺構面から第3遺構面にかけての遺構の内外から多くの動物遺存体（骨等）が検出されたが、詳細な鑑定を行うことができなかった。以下に各遺構ごとの検出状況をまとめた。（表1）と、その一部の写真を掲載する。

なお、調査区内で検出された動物遺存体は目に付いたもののみを採取しているため、実際にはもう少し多くの量が廃棄されていた可能性が高いと考えられる。

全体的な検出状況としては、SK03での検出量が最も多い。動物の頭蓋骨の一部と思われる骨が1点検出されているが、それ以外は骨の種類が限られる印象を受ける。SD04では犬と思われる小動物の頭部と大きな動物の歯と思われるものが検出された。SD05内の遺物包含層では犬と思われる頭部と、微細だが魚の骨と思われるものも1点検出された。

表1．動物遺存体出土状況

遺　構	検出された点数	重さ（g）
SK01	37	130
SK02	3	40
SK03	41	705
SD04	22	465
SK05	4	40
SK06	1	3
SK07	1	20
SD05	15	270
遺構外	21	280

※微細片は点数として挙げていない。
頭部骨のようにまとまって出土したものは１点としてカウントした。

動物遺存体（骨等）

註

註１　松江市の西に隣接する出雲市の中心部（現在のJR出雲市駅の北側）に「今市町中町」という地名が残る。

註２　城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査（母衣町180-28、180-29）発掘調査概報　平成23年（2011年）6月

第４章　まとめ

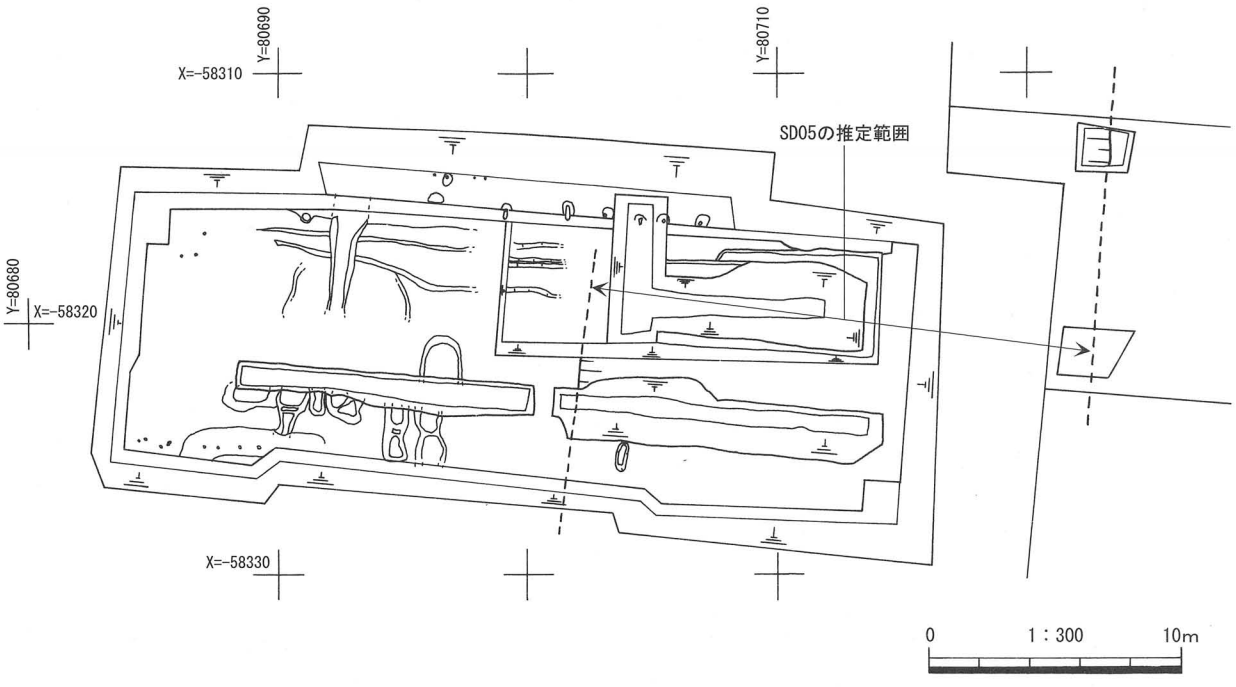
今回の調査では、自然堆積層も合わせて4つの面の調査を実施した。

城下町が造成される以前の旧地表面の調査は、調査面積が狭小ということもあり明確な遺構の検出には至っていない。造成が行われる17世紀の初頭までの旧地表面と考えられるのが、第28図の第6層（第Ⅰ層）である。この土層は松江城下町遺跡で広く確認される有機質層であり、城の東側で連続的な調査が行われている城山北公園線改良予定地内の調査成果では、城に近い殿町で標高が高く標高0.798m、東に向かうにつれて徐々に標高が低くなり、850m東にあたる地点では標高-0.25mを測る。今回の調査地点の北側は、城山北公園線の母衣町68調査区にあたり、ここでの旧地表面の標高は0.305mであるのに対し、今回の調査地での標高は0.4～0.6mであった。今まで、東西軸の調査は進んでいるが、南北軸の調査は少なく、今後の調査により訂正があるかもしれないが、南北軸で考えた場合、ほぼ水平であったか北が低く南が高い地形であった可能性がある。

自然堆積層の上に盛られたA層を基盤とする第3遺構面は、江戸時代に造成された最初の遺構面であることから、松江城下町を最初に造成した堀尾氏の遺構面と考えられる。

堀尾期（1607~1633年）の城下町の町割りは『堀尾期松江城下町絵図』が残っており、この絵図を現在の地図の縮尺に当てはめると、本調査地は堀尾因幡の屋敷地に比定される場所である。絵図によると、南側を書き始めとして「堀尾因幡」の名前が書かれている。江戸時代当初の絵図であり、一般的に言われている書き始めが玄関とは限らないが、遺構に建物跡が無いことから、屋敷地の最奥部を調査した可能性は高い。

ただし、この面で検出された土坑は、これまでの城下町遺跡の発掘調査で確認された土坑に比べて



第52図　SD05の推定範囲図

非常に浅く、また、遺物についてもSK02から出土した第27図6、SK03の出土遺物である第30図2、4、5など後出する時期の遺物も含まれている。この時期まで遺構面が存続していたのでは無く、遺構面を削平された可能性も考えられる。このため、建物跡が無かったのではなく、削り飛ばされた可能性も否定できない。

特筆すべき遺構としてSD05が挙げられる。東西の屋敷境と考えられる素掘りの溝であるが、これまでの堀尾期の屋敷境として検出されている、家老屋敷[註1]第4面SD01が幅約4mであるのに対し、SD05は幅が約20mを測る巨大な溝である可能性が高い[註2](第52図)。このSD05は、検出位置から考えて堀尾因幡と塩津三郎四郎の屋敷境となるものであろう。

この他、南北の敷地を分ける屋敷境となる可能性のある遺構にSD04がある。SD04は調査区外となるため北側の調査は出来なかったが、試掘調査時にT-1トレンチからも落ち込みが検出されており、土坑ではなく溝と判断した。この遺構は、調査区と調査区の北を分断する屋敷境のような遺構に見えなくもない。検出位置から考えて、堀尾因幡と山本次兵衛の屋敷境を捉えた可能性が高い。

SD04、SD05は共に石垣などは伴わない素掘りの溝であり、松江城下町の初期造成を考える上で興味深い。

今までの松江城下町遺跡の発掘調査では、城下町造成時に屋敷境や道と屋敷との境となる場所に素掘りの溝が掘られたことが分かっている。しかし、SD05のような大規模な溝は今まで確認されたことがない。素掘りの溝が掘られた目的としては、排水や地割等のためであったと思われるが、この遺構についてはそれ以外の目的があったものと考えられる。例えば、この溝が南の堀川まで繋がっており、屋敷のすぐ近くから船で出入りが可能で、防衛上の機能があったということも考えられる。

第2遺構面では第3遺構面と同様に、屋敷建物に関する遺構は検出されなかった。調査区は屋敷地内の空閑地部分であった可能性が高い。ただ、検出されたいずれの遺構も浅く、第3遺構面と同様に遺構面が削平された可能性もあり、建物跡が無くなっていることも考えられる。

検出されたSD01、SA02は共に東西方向に作られており、屋敷境を示す可能性がある。ただ、この面で検出された遺物の時期は、堀尾期（1607~1633年）の17世紀初頭から松平期（1638~1871年）の19世紀代に入るものまであり幅が広いことから、遺構の時期を特定することは難しい。第3、2面共に堀尾が造成した可能性も無くはないが一般的に考えて、堀尾後の京極（1634~1637年）、松平（1638年~）期に造成された遺構面であろう。

第2遺構面より上層については撹乱が著しく、標高1.1m前後で精査を行った第1遺構面についても結果的には生活面ではなく、江戸時代の遺構面を確認することはできなかった。

撹乱層からも大量に江戸時代の遺物が出土しており、本来は嵩上げ造成された複数の遺構面があったのだが、近現代の再開発で遺構面ごと撹乱を受けたものと認識している。

さて、居住者が確かな第3遺構面について、屋敷地のどのような部分の調査を行ったのか考えてみたい。江戸時代の遺構面からは建物跡は検出されておらず、第3面についても検出されたのは素掘りの土坑と溝だけであった。後世の撹乱で建物跡が掘り飛ばされた可能性もあるものの、建物跡が検出されていないという事実を積極的に評価するのであれば、堀尾期には屋敷地の奥側の空閑地の調査を

行った可能性が考えられる。松江城下町で屋敷地の大部分の調査が行われた松江歴史館南屋敷[註3]第4遺構面（堀尾期）の調査成果と比較すると、短冊形区画にあたる。短冊形区画からは、建物跡は検出されておらず、ゴミ土坑など発見された遺構も類似しており、共通点も多い。武家屋敷地内での土地利用を考える上で非常に興味深い。

松江城下町遺跡の本格的な調査は平成18年に始まったばかりであり、まだまだ未解明な点が多い。今回の調査は中心市街地にも関わらず、470㎡の調査面積が協力いただけた。土地の空間利用や屋敷境の構造を解明する上で非常に大きな調査成果を提供することができた。

註

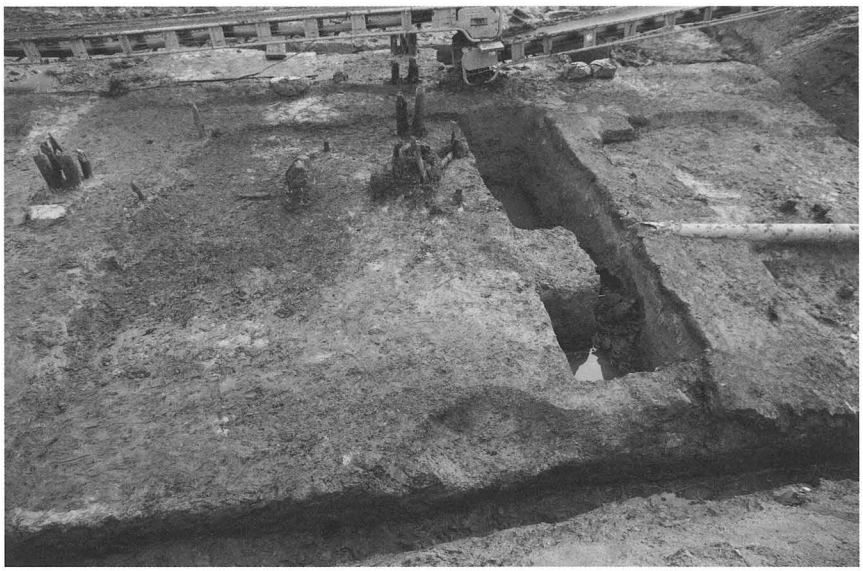
註１　松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）

註２　現在、発掘調査中の松江城下町遺跡（母衣町127-2）でSD05の東端部と思われる遺構が検出された。

註３　註1の遺跡中の南屋敷

写 真 図 版

調査前全景
（東から）



第2遺構面
SK01（北から）

第2遺構面
SD01（西から）

図版２

第2遺構面
SA02土層断面
（南から）

第2遺構面（東側）
（西から）

第3遺構面（西側）
全景
（東から）

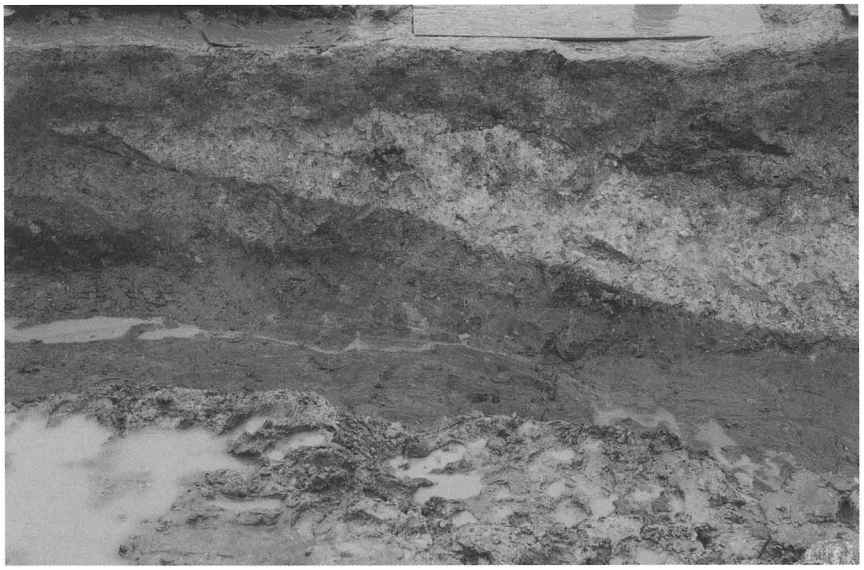
第3遺構面
SK02（南から）

第3遺構面
SK05～08、SK12～13
（東から）

第3遺構面
SK08（東から）

図版４

調査区東側T-6
北壁土層断面
（南東から）



T-6北壁
SD05西側
土層堆積状況

SD05
遺物検出状況
（第44図6）

T-7東壁内
ウラジロ層検出状況
（西から）

T-7西壁（南北）
土層堆積状況
（東から）

調査区中央
自然堆積層（第Ⅰ層）
上面の乱れ
（西から）

報告書抄録

ふりがな	あるふぁすていつほろまち２しんちくこうじにともなうまつえじょうかまちいせき(ほろまち100ほか) はっくつちょうさほうこくしょ
書名	アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う松江城下町遺跡(母衣町100外) 発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ	第149集
編著者名	古藤博昭
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F（文化財課） TEL：0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1（埋蔵文化財課） TEL：0852-85-9210
発行年月	2012年９月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
松江城下町遺跡(母衣町100外)	島根県 松江市 母衣町	32201	D1026-67	35°47′10″ 133°05′58″	20111114 ～ 20120222	470㎡	分譲マンション新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松江城下町遺跡(母衣町100外)	城下町遺跡	江戸時代	土坑 柱跡 溝状遺構	陶器 磁器 土器 金属製品 石製品 木製品 瓦	松江城下町の造成時に掘り込まれた素掘りの大溝(SD05)が検出された。これまでの発掘調査では確認されたことが無い大規模なものである。

松江市文化財調査報告書 第149集

アルファステイツ母衣町Ⅱ新築工事に伴う

松江城下町遺跡（母衣町100外）
発掘調査報告書

平成24(2012)年9月

発 行　島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
　　財団法人 松江市教育文化振興事業団

印 刷　有限会社　松 陽 印 刷 所
　　島根県松江市学園南2-3-11